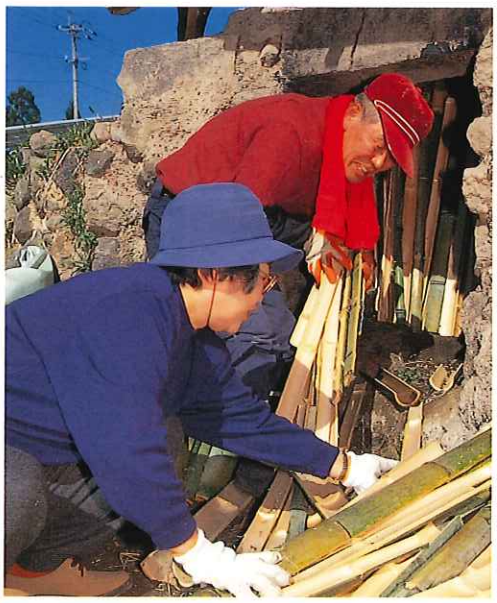
地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら DePOLA 18

2000年
春夏号

特集 ふるさとを人と自然・文化のふれあいの場に
交流事業最前線



［ふるさとを人と自然・文化のふれあいの場に――交流事業最前線］

特集企画に寄せて

農山村と都市。お互いが自分たちに満たされていないものを求めて、交流・連携に力を入れるようになってきた。都市住民は、農山村の豊かな自然や素朴で暖かい田舎の人々とのふれあいを求め、農山村は、都会の人々との交流が地域に活力を与え、新しい可能性を拓いてくれることを願っている。

とくに若者が次々に都会に出ていき、子供の姿がめっきり減ってきた過疎地域にとって、都市などから人が来て賑わうことは、地域や住民をこの上なく元気にしてくれる。

それと同時に、都市の人々との交流を深めることで、農山村のすぐれた資源や環境の魅力が再発見され、それが経済効果にもつながっていく。

「交流」とは、地域の持っている資源、環境、伝統文化、歴史、人間的ふれあいなどを他地域の人々に提供し、それを通じてお互いが共存共栄し地域の活性化や人間的な感動、生活の向上等をめざしていこうというものである。

地域間に「ひと」「物」「情報」が交わることによって、それまでとはちがったものの見方ができたり、地域の魅力を再発見し、住民の意識の啓発や誇りにつながることが期待できる。

過疎地域における「交流」事業は、昭和40年代から始まったとみられるが、とくに活発になってきたのは60年代に入ってからで、現在ではほとんどの市町村が何らかの形で多種多様な地域間交流事業を行っている。

当過疎地域問題調査会では、過疎地域における交流事業の現状と課題を把握し、今後の地域活性化のための交流施策のあり方を提言するため、平成10年度に、地域問題の専門家による調査研究委員会（委員長・千葉経済大学柴田啓次教授）を設置し、20町村の現地調査と50町村の事例を調査研究し、それを「過疎地域活性化のための交流事業のあり方に関する調査研究」報告書としてまとめた。

これによると、「交流」の捉え方や事業内容、主体となる団体なども、都市の人たちの「ふるさと志向」の高まりや農山村に対するイメージの変化に伴って、大きく様変わりし、多様化してきたことが伺える。しかも以前にはほとんどの場合、町村が主体となって事業を仕掛けて実施したが、最近は住民が企画の段階から参加したうえ、実施の場でも行政と一体となって事業を支えている事例が多くなってきている。とくに過疎地域では、住民が大きな役割を担っており、「交流」事業の成功事例には女性や高齢者の活躍によるものがかなり多い。

本誌では、10数年来の実績が定着した活動、従来の行事等に体験学習や交流会等をプラスして付加価値を加えた活動、新しい試みを住民が主体的に推進している交流活動などを、地域住民と参加した都市側の人たち双方の声を入れながらまとめた。

私たちが現地で感じることは、子供たちの農業体験教室や交流会のためのいろいろな準備や指導、さらに郷土の手料理を用意してもてなす農家の人たちのご努力が大変なものであるということである。だから、そこまでして都会の人たちにサービスしなければならないのかという声を耳にしたことがないわけではない。しかし、これらの交流活動を通して「子供たちが、農業の大事なこと、自分で作物を育てていくことの嬉しさ、農作業の大変なことをわかってくれた」、「我々のもてなしに感動し感謝してくれて、毎年楽しみに出かけてきてくれるようになった」、「山の仕事が厳しい、辞めたいと思っていたが、山がいろんなことに役立っていることを分かってくれて、誇りを持ってやろうという気になった」、「都市の人から逆に地域の良さと魅力を改めて教えられた」という住民の声を数多く聞くことができた。

単なる交流にとどまらず、都市からの移住者を期待する定住施策、Uターン、Iターンへの期待、農産物等の産直等、次の交流事業へのステップが盛んになり、一層大きな効果が各地に現れている。

都市住民の「ふるさと志向」は確実に強まっており、道路や下水道の整備とあいまって、いずれ将来は自然環境のすぐれた農山村に住みたいという人が予想以上に増えている。

子供たちにとっても、大地や自然とじかにふれた生活体験や教育学習を与えることの必要性が今ほど求められている時代はない。その意味でも「21世紀は田舎が最も必要な受け皿となる」（北海道豊寒別小学校長）と語った言葉が印象的である。

スペースの関係や、取材時期が秋・冬であったために、取材・撮影できない町村もあったが、別の機会に取り上げてみたいと思う。

もうすぐ春、美しく逞しい大地の芽吹きのなかで、今年もたくさんの交流、出会い、体験をスタートさせていきましょう。

「でぼら」編集部

イラスト／松田けんじ

地方と都市を結ぶ
ホットライン・
マガジン

DePOLA（でぽら）

NO.18

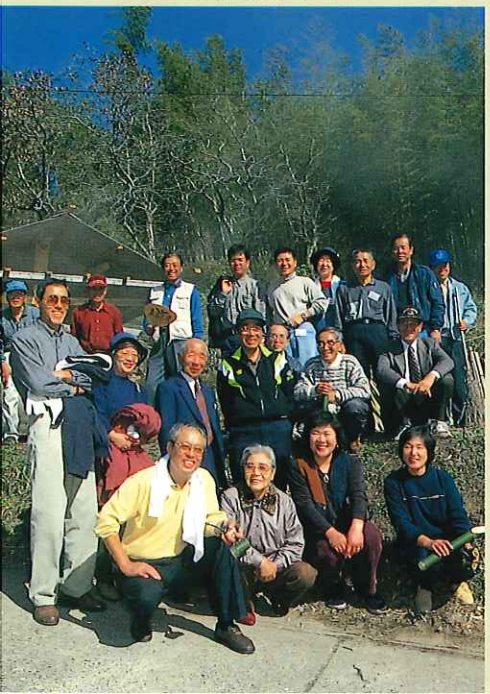
●もくじ

「でぽら」とは——

Depopulated Local Authorities（人口が少ない地域）、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村数は1231、全市町村の38%にも達しています。過疎地域は貴重な自然環境と農林水産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土が多数残っています。
農山村の活性化と発展をめざすため、地方と都市を結ぶ交流誌として『でぽら』をお届けいたします。回覧し、多数の方にご高覧いただければ幸いです。

●写真／表紙①
上左／竹炭焼き体験教室（上津江村）上右／里親留学の小学生と里親（浜頓別町豊寒別）下左／小刀を使って竹細工（中富町）中／自分たちで育てた稲の脱穀作業（宮城県丸森町）下右／クラインガルデン利用者（長野県四賀村）
●写真／もくじ
上から豊寒別小学校授業風景。棚田づくりを手伝う青年（水俣市ふるさとセンター）。「東京花祭り」に登場した赤鬼。オジョールスキー村から来村した中学生たちと、慰霊碑の前で。

▼上津江村「森の集い」の参加者



［ふるさとを人と自然・文化のふれあいの場に——交流事業最前線］特集企画に寄せて——2

■ムラを第二のふるさとに

・週末には都市から50家族が来村して大賑わい「坊主山クラインガルデン」（長野県四賀村）——4
・雄大な自然と温かい交流の中で30数名の親子が「山村留学」（北海道浜頓別町豊寒別小学校）——7
・「自分のお米ができました」田植から収穫まで「日曜農学校」参加親子の感動体験6カ月（宮城県丸森町）——11

●水源の森つくり、棚田の再生。自然の資源を活かして交流の場に
水俣市（熊本県）ふるさとセンター「愛林館」——14
●「夢」を買う。そして夢の実現へ向けて
「家一棟分ふるさとの森づくり事業」（大分県上津江村）——16

■我がまちの交流事業

・泊まって、体験して。遊び心いっぱいの山里（和歌山県花園村）——18
・カブトムシ自然大国に年間20万人（福島県常葉町）——19
・「花祭り」の保存継承を通じて東京と熱い交流（愛知県東栄町御園）——20

■青少年が異文化交流

・山里で暮らしの技を学ぶ 山梨県青少年自然の里（山梨県中富町）——21
・農漁村の文化や自然を〔デザイン〕 京都精華大学生と地域の交流（京都府丹後町）——24
・日ロ友好の絆をオホーツク最北の村から サハリン州オジョールスキー村との国際交流（北海道猿払村）——26
●住民と行政の協労による「じょんのび村」づくり 連合東京との「雪掘ボランティア」も定着（新潟県高柳町）——28

INFORMATION ［我がまちの交流事業］——30
ダイバーによる海中クリーン作戦（静岡県南伊豆町）／念願のGTレース再開（大分県上津江村）／カリコボーズのワーキングホリデー（宮崎県西米良村）／人情あふれる山里へ山村留学（和歌山県清水町）／「交流事業のあり方に関する調査研究」で扱った交流事業
☆全国過疎地域活性化連盟からのお知らせ——31

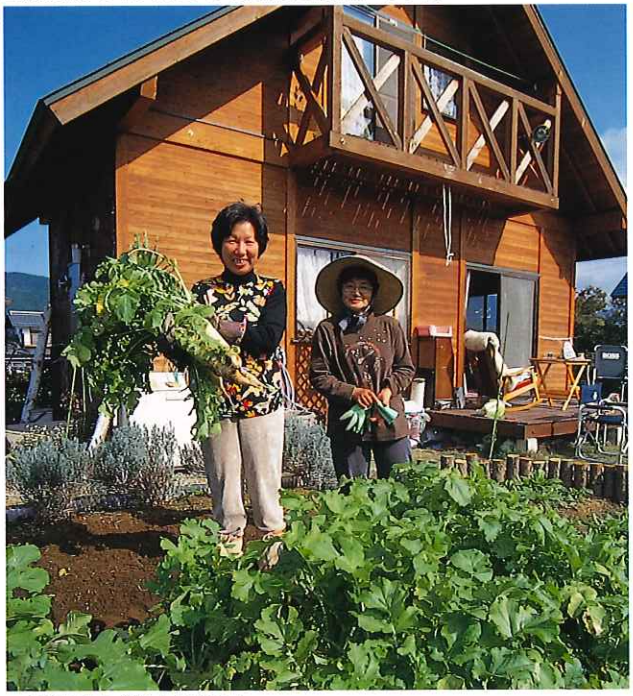
週末には都市から50家族が来村して大賑い

「坊主山クラインガルデン」（長野県四賀村）

▲坊主山クラインガルデン（手前は園内休憩ベンチ）。

北アルプスを望む美しい田園に出現した市民農園（クラインガルデン）。1区画約300㎡の手頃な広さの中に、ヨーロッパ風のおしゃれなラウベという休憩小屋と平均150㎡の農場がある。現在53戸が会員として利用料を払って入所しているが、皆この農園が気に入り「生涯住みつづけたいわが家」と語る。

交流活動、作業分担、無農薬栽培の厳守等々制約も多いが、週末にはほとんどの人が出かけてきて、農作業に精を出し、又、周辺の観光や買物、農家とのお付き合いを楽しんでいる。隣接して新婚さんに安く貸し出す一戸建て住宅もあり、坊主山クラインガルデンは休息、自然とのふれあい、交流のニューフェイスとして注目されている。



▲長谷川さん（左）と遊橋さん。

毎週欠かさず東京から
長谷川さん夫妻

クラインガルデン中央にクラブハウスがあるが、その近くの家の菜園で二人の主婦が楽しそうに野良作業をしている。長谷川さんと隣家の遊橋さん。大根、白菜、なっぱ等が立派に育ち、冬を迎える前の手入れに忙しい。

長谷川雄司、和恵夫妻は東京中野区から週末には欠かさず2匹の犬を連れて出かけてくる。

「主人は信州大学の事務局に勤務しているので月2回はここを生活の拠点にしています。冬は子供たちがスキーの宿に、夏は涼しくて快適、農作業も忙しいので、私は1か月半程滞在しました。5年契約ですが、それ以降も借用できますので、これからも第二のわが家としてずっと利用したいと思っているんです」と和恵さん。

来村した時は、来た日数に○をつけてクラブハウスに提出する。利用者にはいろいろな条件が定められてあり、月に3泊または6日以上利用すること、毎月計画している各種交流事業に積極的に参加すること、農園は有機無農薬栽培であること等が決められている。

ゲストハウスの行事だけでも、6月ウェルカム・パーティ、8月納涼祭、10月収穫祭、11月土つくりとあり、他にガーデン地区の草刈り、清掃等もある。

「当番になるとシーズン中3日間は村の草刈りにも参加するなど、何かと忙しいんです。でも参加するのが楽しく、親しい人達と花づくり、料理等の研究会も作っています」

利用会員になるために5倍以上の倍率をクリアした。利用者は頭金として25万円、1年間の利用料25万円、クラブ会費10万円を支払う。

犬たちも四賀行きを楽しみにしているらしく、のんびりとベランダで昼寝をしていた。

有機農業の先進地
農家と都市市民の交流から誕生

四賀村（人口6374人）は松本市に隣接し、バスで17・7㎞、約30分。篠ノ井線明科

◀住民も自由に利用できるクラブハウス。

駅から7・9㎞と交通も比較的便利である。会田川、保福川の二つの川に沿って農耕地と穏やかな山林があり、総面積90・25㎢のうち82％が森林。その先に見える北アルプスの眺望が、美しい田園風景に花を添えている。

しかしもともとは養蚕が盛んだった村で、不振になってからは、取り立てて目立つ農業も観光資源もなく、中途半端な環境にあった。恵まれた自然環境を生かして村に活気をつけたいと村と有志らが考えていたところ、後の中村村長（当時全国養鶏経営者会議会長）がヨーロッパを視察した折、クラインガルデンに感銘を受け、ぜひ日本でも実現したいと考えた。

四賀村では昭和60年に有機野菜の栽培事業をはじめ、実践団体「アルプス自然農法研究会」が発足している。有機野菜は都市市民に提供され、見学に来る消費者も多かった。農家と都市住民の交流の中から、「週末には四賀村で過ごしたい」「家庭菜園をしたい」という声が聞かれるようになったことが、四賀村風クラインガルデン事業スタートの契機となっている。

平成3年に中村村長が誕生、村民有志による「信州クラインガルデン研究会」がつくられて農園づくりがはじまり、5年にモデルとして3区画が整備された。一年間モニターとして利用した人の意見や利用状況を検討して出来上がったのが現在のクラインガルデンだった。

平成6年に第一期21区画、7年に4区画と毎年整備、利用者を応募し、9年に53区画からなる坊主山クラインガルデンが完成した。休憩小屋ラウベという名称だが、バス、台所、居間、寝室もある2階建て木造住宅（延床面積約38㎡）。広々とした通路や垣根、無農薬であれば自由に利用できる農場は人気を呼び、倍率は4倍から10倍にもなった。

園内には交流拠点クラブハウス、ゲストハウスがあり高齢者達が管理、清掃に当たっている。みな農業のベテランだから、頼まれれば野菜づくりをアドバイス、小遣いにもなり生きがいが出来たとお年寄りにも好評だ。

利用者の住所地を見ると、県内17、県外では東京都11、神奈川県7、愛知県5、大阪府3ほかで、高知、沖縄からも1組ずついる。

ご主人は定住して勤めと野菜づくり
奥さんは花卉づくりのベテラン
遊橋さん夫妻

遊橋さんはクラインガルデンづくりにも関わりながら最も早く入居した一組で、自宅は隣町の豊科。ご主人の洪基さんは元県農務課研究室に勤務、3年前に猛勉強して樹木の医者の資格も習得してる。農業の経験はなかったが関心は強く、ガーデニングを研究するためヨーロッパ各地へも2回出かけているほどの凝り性で、居間には植物や農業に関する本がぎっしり。

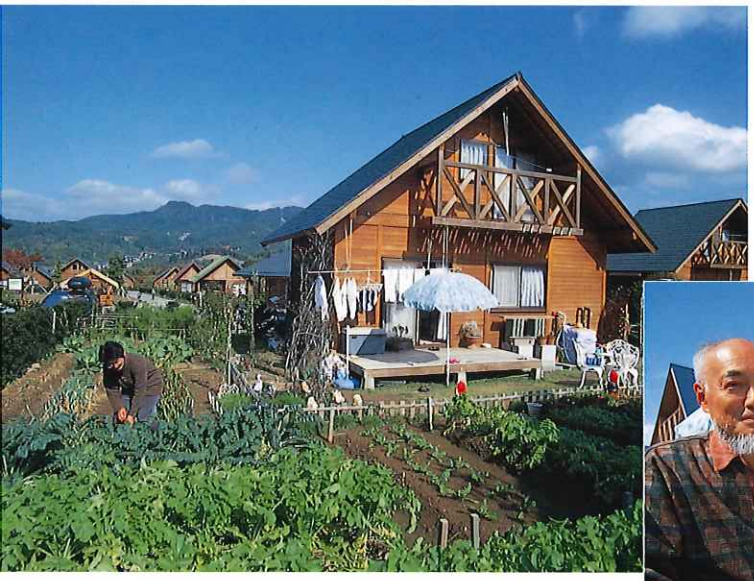
「主人はすっかりここが気に入って365日寝泊まりし、ここから勤め（民間の建設会社）にも出かけています。私も半分以上は四賀村暮らしです。農地の半分が私用の花栽培地で、ありとあらゆる花を作っているんです」と千鈴子さん。

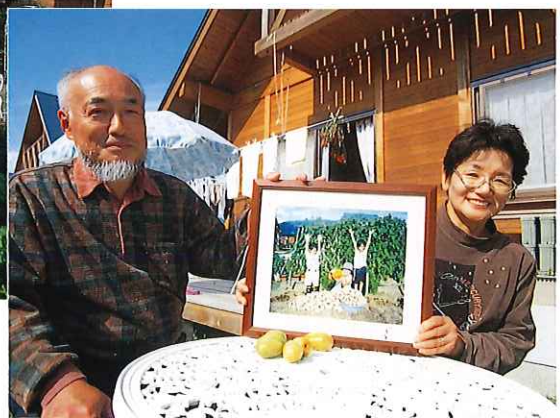
訪れた11月には残念ながら華麗なる花たちに会えなかったが、毎年園主催のコンテストで1位になっており、利用者たちから何かと頼りにされている農園づくりのベテランだ。

菜園では、大根だけで5種、桜島大根、辛味用・煮物用の京大根など、店頭では購入できないものを栽培。旅行の折にその土地で種を買い求めて、苗床づくりから手がける。ピーマン、茄子、白菜、トマト、シシトウなど大抵の野菜が自家製。

「今年はジャガイモが大豊作だったんです。美味しい男爵イモがミカン箱に5～6箱取れまして」といって収穫した時の孫たちとの写真を見せてくれた。

「ここはもと桑畑だったところで休耕していたため農地としては使いものにならず、1、2年目は土づくり、鶏糞、牛糞をいれ、腐葉土を作り、4年目でようやくほくほくの土になりました。大変なのは、ここでは農薬や化学肥料を一切使いませ





孫達とじゃがいも収穫時の写真を持った遊橋さん夫妻。庭にはディズニーの人形等も沢山置いてある。

遊橋さんの庭。本物の小鳥もよく来る。

有機野菜や採種で専業農家として頑張る平林さん夫妻。

んので、虫とり作業が大仕事。朝起きると虫とりが私の日課で、テントウムシだけで150匹とる日があります。取らないと他の農園にも影響しますから殺生していますが、どうしてこんなにいるんでしょうね、農家の苦労がよく判ります」とご主人。

安曇野、奥信濃には貴重な大樹が多いので、こちらはボランティアで手入れ、治療に出かけている。

都市との交流で農業に活気が出る「田舎の親戚制度」を推進する

平林俊樹さん

四賀村には「田舎の親戚ふれあい会員」という制度があり、年会費2万円で年4回季節の特産品を宅配しているが、それとは別にクラインガルデン会員を対象にした「田舎の親戚制度」がある。1区画に1軒の地元農家と親戚関係となり、親戚が農作業の指導や水やり等を手助けする程度の、あまり深い付き合いをしない肩の凝らない親戚。

その一人、平林俊樹さんを会吉地区の自宅へ訪ねてみた。有機野菜を最も早い時期から手がけ「信州クラインガルデン研究会」(20人)メンバーの一人。

山間の斜面地だが、この自然環境がよく、京都のタネ会社の委託を受けて採種農業を行っている。厳選したタネを最高の条件で栽培してタネを採集するもので、平林さんのタネ(大根、南瓜、茄子など)は主として北海道で使われているとか。

「よその雑菌が入ってきにくい地域であることと、媒介する蜜蜂がいるなど自然が残っています。農薬や化学肥料を極力使わない農業を続けてきたことも重要です」

農業に見切りをつけた人達を指導して、いま4、5軒が採種農家としてやっている。

クラインガルデンの開設について平林さんは「村民の中にはよその人のためにそこまでする必要はないと言う意見もありますが、私はそうは思わない。都市の人がやって来ることで村に活気が出てきたし、建築等の仕事も増えています。シルバーセンターの人達は生きがいづくりの場が出来たと張り切っています。都市の人が来てくれることで、自分たちの村のよさ、農業の魅力を逆に学び、再確認することができました。交流事業は目先の変化ではなく、長い眼で見ながら我々が発想を変えていくことが大切です。利用者は年35万円支払うほかに、来るたびに交通費もかかりますから結構大変ですよ」と語る。

村では研究会や村民の意見を検討して、次のクラインガルデンづくりを計画している。現在利用希望者は100名を越えているが、退所者は年2、3名。そのため新たな地域に新設することを検討、山に近い休耕地を活用して、菜園、山仕事など多様に活用できるガルデンが登場する予定だという。

平林さんと親戚になっている木村邦男・敏江夫妻(川崎市)が午後到着した。

「ここは気に入っているが、僕自身はいろいろ制約のある中で野菜づくりをするより、山に入って下草刈りしている方がいいね。全体の景観や風通しのよさを考慮してか大きな木がなく、原則2m以上の木は植えてはいけないことになっています。新ガルデンには自然形態を残して樹木の多い雰囲気が欲しいですね」とご主人は言う。

信州で生まれ、学生時代を安曇野で過ごした邦男さんは定年後のセカンドライフを楽しみたいとここへやってくる。四賀を拠点に史跡、温泉地を訪ねるのが楽しみで、いつも高速を使わず下の一般道路をゆっくり走ってくるのだという。

「平林さんのつくる野菜は最高、とくにあれほど美味しいトマトは他にありません。春先にいろいろアドバイスしてくれることがとても役に立っています。奥さんの作る漬物も最高です」と敏江さんは語っていた。

坊主山クラインガルデンの隣には新婚世帯用の一戸建て住宅が5棟建っている。村には結婚推進会というのがあり、ここに登録して結婚した人が優先的に入所できる。第1号は埼玉県からきた花嫁さんとUターンした青年。ラウベの倍の広さを持つ木の香あふれる家で、今後も次々と建設が予定されている。都市の人だけでなく地元の人への配慮を反映した施設といえよう。

到着するとたちまち農夫に、木村さん夫妻。

●四賀村役場農政課☎0263(64)3111

文／浅井登美子　写真／小林　恵

ムラを第二のふるさとに㉑

雄大な自然と温かい交流の中で30数名の親子が「山村留学」

（北海道浜頓別町豊寒別小学校）

▲牧場の先、小高い丘の上にある豊寒別小学校

▲クッチャロ湖の白鳥たち。

▲新校舎となった豊寒別小学校と6年生の授業風景。

▲定住留学予定地に建設中のモダンな家。

オホーツク海を望む大自然真っ直中にある44戸の小さな集落。その地域の核となる小学校に新校舎が出来て5年目、地元住民、学校の熱意ある取り組みで今では14名の小学生が山村留学、定住をめざす親子を含めると30数名が都市から移住して、地域の人々と交流しながら伸びやかにたくましく生活している。

豊寒別の全世帯がPTA会員「北オホーツクの大自然で学ぶ会」を結成

日本最北端の稚内市よりオホーツク海を90㎞南下した位置にある浜頓別町（人口500人）は酪農と漁業の町で、白鳥や動植物の保護地区クッチャロ湖、天然温泉、ウソタンナイ川砂金採掘公園等の観光資源も豊富な町。豊寒別地区は市街地から約7㎞南側に位置する40数戸の小さい集落で、海と大地の中に自然林や川のある豊かな土地である。

平成3年、豊寒別小学校を改修するに当たって、集落の人が全員集まった。学校は地域の中核である。しかし改修しても児童数の減少で存続しなくなるのではないか、なんとかして学校の灯を守りたい。当時の児童数は14名だが6～7年後には半減、校舎は30年を越え危険校舎に指定されていた。

校舎の改築を契機に、同校のOBが中心になって「北海道北オホーツクの大自然で学ぶ会」（以下「学ぶ会」）をつくり、山村留学制度を導入していくことになった。地域のほぼ全戸がPTA会員になって協力、学校に事務局をおいて先生方が受入れを整えるとともに、町は留学生への助成金、里親等への援助、住宅の整備等を図った。

平成7年、開校80年を迎える年に新校舎が完成、2人の留学生が入学してきた。瀟洒な学校での個性豊かな楽しい授業、地域の人や受入れ家庭の温かい対応等が好評で、翌8年には留学児童8名、10年には12名、そして昨年11年には14名と増え、地元の子供の6名と合せて、20名の子供たちが学ぶ活気ある学校となっている。

「定住留学」を特色にしたホットな取り組み

豊寒別小の山村留学の特徴は、地域の住民が協力して宅地200坪を無償提供する「定住留学」をはじめ、児童が酪農家等に留学する「里親」、子供と親（父または母）が一緒に留学する「親子留学」の3つの制度を設けていることである。

定住留学は、通算で6年間在学できる児童のいる家族が、豊寒別地域での定住を希望する場合、宅地200坪を無償提供するというもので、住宅建設の準備期間として町営の留

▶豊寒別小学校の児童、先生、事務員、休憩時間に全員集まって記念撮影。子供たちは T シャツ一枚で元気だ。

学者専用住宅に入居できる。町から3年間、月額3万円の補助金が受けられるので家賃は1万5000円となっている。親子留学の場合も同様の助成が受けられ、住宅や仕事の世話もしてくれる。里親留学は4～6年生を対象に一年間、主として酪農家の家庭にホームステイするものだが、実際には2年、3年を希望する子供が多い。

ユニークなのは、留学生には子牛一頭が贈られるオーナー制度。自分の子牛として仲間として世話をしたり、動物にふれあってもらおうという農家の思いで生まれた制度だが、牛が大きくなると世話が難しくなるため、実際には酪農家が飼育・世話をし、売った時は代金の一部が贈られるようになっている。留学生柿沢ハルナさん(小6)は、子牛の世話を毎日熱心にしてよく散歩にも連れ歩く。その微笑ましい姿にお年寄りは涙ぐむこともあるという。

田舎こそ子供にとって必要な教育の受皿に

豊寒別小学校は、豊寒別地域のほぼ中央の丘の上にあった。お洒落な玄関まわり、広々として室内遊びが楽しめる廊下、先生の工夫やアイデアがそこかしこに生かされている教室。都市の画一的な学校からきた子供たちは大喜びしそうだ。学校の裏手には学校とPTAが協力して作った遊歩道や森、果樹園、アスレチック用具などもある。学校の行事も5月のミッキーの森開き、お年寄りとの植樹にはじまり、キャンプ、収穫祭、クロスカントリーと盛り沢山。

平成11年現在、現有児童6名、留学児童14名（里親3、親子留学5、定住留学6）で、教職員は8名。事務や給食等の仕事には留学児の母親たちが当たっている。

今年は大阪から新人の女の先生もやってきた。「北海道は憧れの場所でした。豊寒別小学校はとても楽しくてやりがいがあります」と語る辻村先生を子供たちが抱きついて放さない。

山村留学に大きな役割を果たしているのが安田正志校長。教頭時代を含めて6年間同校に勤務し、地域や行政、父兄との橋渡し役を担ってきた。

「ここの山村留学がよそと違うのは地域ぐるみで熱心に取り組んでいることです。豊寒別を新しい故郷にしてもらいたいと大変協力的で、その熱意が来町した人達にも伝わっているのだとおもいます。20世紀は田舎の人が都市へ出ていったが、21世紀はリストラや就職難等で田舎が受皿になる時代です。そのために地方は情報を発信して整備していかないと。教育も少子化で競争の時代になり、小学校を選択するようになるでしょう。私は田舎こそ自然環境が豊かで、体験を通して学び、自立心を養うなど、最も必要な教育の場を提供できると思っています」と安田校長は語っていた。

学校のすぐ下に最初に里親を引き受けてき

▲以前留学していた人が柿を送ってきてくれた。母親も参加して干し柿づくり。
◀平山さん一家(町営の留学生住宅にて)

山村留学の推進役、安田校長。

▶里親としての思いを語る蓑島さん。
▼牧場で。里親留学している安坂大輝君(右)と八重子夫人、酪農実習の若者長塚さん(東京板橋から来町)。

た蓑島進さんの牧場がある。留学2年目の安坂大輝君(小5)を預かっており、彼はここが気に入って「6年になってもいるよ」と言う。「何しろ遊ぶのに忙しくて牛舎の手伝いは全然しないよね。写真取る時はそれらしくポーズするのが上手になったけどね」という八重子夫人の言葉に頷いて笑いながら、二人は腕を組んで牛たちのいる牧草地へ向かった。まるで親子か孫のようだ。蓑島牧場にも酪農実習生がいて留学生のよき兄貴役となっている。

大輝君の東京にいる母親も蓑島家が好きで、6月の運動会と夏休み、10月の学芸会、正月にはやって来て家族の一員として過ごしていく。いままで3人の子供を預かってきたが、最初の男の子は耕うん機を使うのが好きで、ここから農業高校へ行きたいと電話してくる。ご主人の進さんは相当の子供好きで、みんなを連れてレストランや催し会に行き、誕生日には贈り物も。「でも二番目にきた子供は夏休みに親の元へ帰ってからホームシックになり続かなかった。私らはいくら好かれても親にはなれない。こちらへ一人でよこすのはかわいそう、出来れば送り届けて欲しかった」と言ってご主人は涙ぐんだ。

「でもいまはやっと慣れてどんな子供が来ても大丈夫」という夫妻の暖かい気取らない雰囲気が印象的だった。

理想のわが家を手作り中「定住留学」の平山さん一家

平山剛さん(31)一家は3人の子供がいて、大阪堺市から9年に定住をめざして留学してきた。奥さんの知世さんは同級生で、20歳の時結婚した。

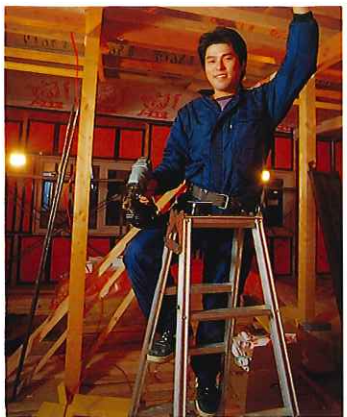
「もともと田舎暮らしがしたいと思ってきたのですが、22のときに子供ができて、働いて食べるのに忙しかったんです。北海道の他の地域も見てきましたが、豊寒別の地域、学校が一体となった取り組みに感動しました。将来は酪農をしたいので2年間はJAで300頭の子牛の世話をし、いまは住宅建設資金も必要なのでトラックの運転手をしています」

奥さんは豊寒別小学校の事務職で働き、あずささん(小3)、簾君(小2)の他に、ここへきて生まれたしおりちゃん(2歳)も逞しく育っている。町営の留学者住宅に住んでいるが3年経つので、目下一戸建て住宅を建設中だ。

無償提供してくれた土地は、学校にも程近い雑木林の中にあり、隣には町営スキー場があり、2階からはオホーツク海が眺望できるという最高の場所。納得のいく理想の家を作りたいという平山さんは、材料、資材を購入し、基礎工事以外は、大工、内装もほとんど自分で手がけている。

八分通り出来上がった家を見せてもらったが、寒冷地用に二重三重に断熱材を入れ、天井裏に24時間セントラルヒーティングを配している。高級ムク材のフローリング床で、2階が子供部屋や寝室になる。当誌が出来る頃は入居して、温かい家で冬の北海道の暮らしを満喫していることだろう。

念願の田舎暮らしを実現、平山さんの新居。大工の腕も一級だ。



犬や猫も大切な家族（猫たちは撮影の時逃げてしまったが）。右から2人目が三浦陽子さん。

4人の子供に犬猫10数匹の賑やか一家
「親子留学」の三浦さん

私たちは浜頓別町の宿舎に夕方到着したのだが、夕食を終える頃に那須通也教頭先生がマイカーで迎えにきてくれて、留学生家族の家に案内してくれた。校庭の一角にある教員宿舎に家族と住み、何かあれば24時間体制で対応、地域住民との交流にも必ず参加するという学校側の取り組みに、熱いものを感じる。

親子留学で3年前に移住してきた三浦陽子さんと4人の子供は、学校から徒歩約1時間山の方に位置する酪農家の離れを借りて住んでいる。敷地内にはいまは酪農を辞めて家庭菜園等で暮らす老夫婦の新居があり、三浦さん親子を家族のように面倒見てくれるという。

「家は古くて暖房費はかさみますが、犬や猫もいる私たち大世帯には敷地も広く自由に遊べる林や川もあって最高の場所です。大家さんが大抵の野菜をくれるので大助かり、これからもここにずっと住んでいきたいと思っているんです」と、陽子さんは教頭夫人から教わったという漬物、にしんと昆布、野菜をつけ込んだソーラン漬を出してくれた。

実家は札幌市。長年千歳市に住んでいたが、近代的な新興都市の生活にどこかなじめず、子供たちを自然の中でのびのび逞しく育てたいと思ってきたという。野良猫、引き取り手のない犬を一緒に連れてきたところ、子供たちも大喜びで、いまではシェパードなどの犬が3匹、猫が8匹。「餌代も大変だけど、大切な家族の一員だから」と長男の武蔵君（小6）。居間のソファはシェパードのジャスミンが占拠、ここへきて酪農家から貰ったという真っ白い猫の親子は台所でおっとりとドライフーズを食べている。

子供たち4人のうち、長女は高校3年生で紋別の寮に入り週末にはこの家に帰ってくる。次女は中3で町の中学校に通学、武蔵君も今年は中学生となる。

「子供は順応がとても早いですね。土地の子供より元気なせいか、田舎っ子らしいと言われるんです」という陽子さんは浜頓別のJAに勤め、得意のコンピュータ係をしている。家賃は月2万円だが、町から月3万円の留学補助金を受けられる。

三浦さん親子の留学を親身になって世話をしてくれた「学ぶ会」会長・小川文夫さんの牧場がその奥の方にあった。小川さんは200頭の牛を飼い、体験酪農や牧場での生活を都市の人に味わってもらいたいと手作りで旧家を改造しファームインとしておしゃれなハウスを安く提供している。

小学6年生の田中悠葵君が里親留学しているほか学生の酪農実習生を受け入れる等、常に新しいことに挑戦、即実践していく行動派でもある。

「山村留学では、来る人はみなそれなりに覚悟してやって来ます。受け入れる我々も精一杯やろう、大自然以外何もないんだから、温かく思いやりのある素晴らしい交流を提供しようと呼びかけて来たんです。定住してくれればありがたいが、ここで一年親と別れて暮らす子供たちにとってもきっと人生の中で大きなプラス体験になるだろうと思います」

小川さんは酪農や里親に理解を持つ優子夫人（保母さん）と子供たちとの賑やかな生活を何よりも大切にしているが、苦労してきた時期もあり、人の痛みがよく判るという。

「いまも沖縄から母子で留学して来たいという女性がいます。知らない土地で仕事を探せるだろうかと心配していますので、何とかしてやりたいと、こちらから励ましの電話などもしているんです」と小川さんは語っていた。

冬は日暮れも早く、4時に学校を出た時は辺りは暗くなり小雨がふっている。そんな中を3人の子供が自転車で息を弾ませて帰ってきた。小川さん宅の田中君と三浦剛気、武蔵君。さらにしばらくいくと下校中の女子グループに出会った。みんな4㎞～5㎞歩くのは平気、地域の人が「車に乗せてやろうか」と言ってもきっぱり断るのだという。

「都会っ子は階段を登り下りしているせいか歩くことについてはガッツがある。留学児童に刺激を受けて地元の子も体力向上に励んでいます」と言っていた安田校長の言葉に納得した。

文／浅井登美子　写真／小林　恵

「学ぶ会」会長小川文夫さん。「ぶんちゃんの里」を作り、子供らの酪農体験交流にも力を入れている。

●「北オホーツクの大自然で学ぶ会」　☎01634(2)4530

ムラを第二のふるさとに⑬

「自分のお米ができました」―田植から収穫まで

「日曜農学校」参加親子の感動体験6カ月（宮城県丸森町）

ハセかけからはずした稲をいよいよ脱穀する時。使い方を農家の小野さんから聞く参加者。

その日、稲刈りの終った小野良則さんの田んぼには仙台からやってきた10組の親子連れが早朝から集まった。宮城県丸森町の農業創造センターの主催する「平成11年度　日曜農学校」の、今日は最終日。田植からずっと指導に当たってきた小野さんら農家の人たちの顔も参加者たちの顔も、どこか晴ればれとしている。

晩秋の空は高く晴れ渡り、賑やかな声が行き交う田んぼには、収穫祭のような楽しい気分が広がっていた。

環境に優しい農業の町

宮城県丸森町は仙台の北、福島県との県境に広がる人口1万8500人ののどかな山村だ。町の北部には豊かな水を太平洋へと運ぶ阿武隈川がゆったりと流れ、その豊かな水の恩恵によって、県内一のおいしさといわれる米づくりが古くから行なわれてきた。

温暖な気候と穏やかな風土。阿武隈川の支流域に広がる田園地帯には、稲田や桑畑がどこまでも連なって伸びている。水と緑が美しく調和したこの風景に魅せられて、都会から移住してきた若者たちも何組かいると聞く。

丸森町を歩いていると「安全・安心・うまい米　丸森町の有機米」という農協の看板が目に止まった。丸森町は長年、有機農業に取り組んできた町なのだ。昨年はこの町のみやぎ仙南農協丸森森林地区稲作部会が、環境保全型農業推進コンクールで大賞を受賞している。

環境にやさしい農業への取り組みは丸森町の農業の歴史とそのまま重なるほど古く、この地域がもともと養蚕地帯だったことと大きく関わっている。蚕に農薬はよくないことから、丸森町では農薬の空中散布をこれまでに一度も行なってこなかった。そのことが結果的に、大気も土壌も河川も汚染されずに、今日まで保たれてきたことにつながっているのだ。

そうしたことに加えて、この町には安全な食べ物を求めるみやぎ生協と農協との、20年に及ぶ産直交流の歴史がある。丸森町の有機農業は消費者たちとの交流によって、より確固としたものに成長してきたと言えるだろう。

「丸森型農業」を支える交流事業

「日曜農学校」が開かれたその日、指導に当たる小野さんら農家の人たちとは別に、裏方となり、全体の進行やスケジュールの調整等を行なっていたのが、農業創造センターのスタッフたちだ。

農業創造センターは町と農協との共同運営という形で平成9年に設立された。「日曜農学校」は、当センターが打ち出した「丸森型農業の展開」という指針のひとつ、農村と都市との交流事業の推進という名目の下で生まれた企画だった。

当センター研究部長の星正美さんは言う。「交流事業の他にも、郷土食や伝統工芸など地域資源の新たな掘り起こしや、新商品の開発・販路の拡大など、農業創造センターとして取り組んでいかなければならない課題は、いくつもあるんですが、消費者の皆さんと直

▶農業創造センターの星正美研究部長(左)と、研究員、斉藤誠司さん(右)

▶清流88クラブのメンバー。左から一条さん、小野さん、星さん、大槻さん。

接ふれ合える日曜農学校は、我々にとっても勉強になる良い機会だと、特に力をいれています」

「日曜農学校」は研究部長の星正美さんや研究部員の斉藤誠司さん、みやぎ仙南農協の大槻栄俊さんらを中心に進めてきた。今年で2年目を迎える。「丸森の風土や食を理解して欲しい」(斉藤さん)と、実際の米づくりを体験しながら、丸森の郷土食や文化も楽しんでもらう狙いで、仙台を中心に参加者を募った。

応募者は今年20組にもなり、その中から10組の親子が選ばれた。

「ゆくゆくはもっと増やしていきたいと考えとるんですが、今の受入れ態勢では10組位が限界ですね。親子合わせると40人を超えますからね」と実際の指導にあたる生産農家の星正吉さん。

参加者の顔ぶれは20代~30代のサラリーマン家族が中心で、一家族4、5人での参加が多い。中には去年から引き続き今年も又体験したいという、2年連続参加の熱心な家族もいる。

参加者全員、合鴨の親になる

5月の田植から始まった今年の「日曜農学校」は、6月に稲の生育状況の観察、8月に稲の出穂状況の観察、10月に稲刈り・ハセかけ、そして今回の11月が最終回で、脱穀・もみすりという全行程6ヵ月の研修となった。

実際の指導にあたってきたのは減農・無農薬での米づくりを11年前から実践している生産者グループ「清流88クラブ」(代表海川正則氏)のメンバーたち。田んぼはメンバーのひとり小野良則さんに提供してもらい、5月に一家族3条ずつの苗を植えた。機械を使わずすべて手による昔ながらの田植だ。

一家4人で参加した刈谷正幸さんは、

「僕は農家の出身なんですけど、妻や子供たちは田植を知らないので、ぜひとも体験させたかったんです」と話す。

同じく参加の吉田敦子さんも、田植は初めてという一家4人。

「思ったより深くて、苗を植えるのが大変でした。でも子供たちも面白がって、ホントに親子で楽しみました」

仙台駅近くに住むという吉田さん一家は、周辺に田んぼや畑がないので、ここに来ると新鮮な体験がいろいろ出来ると喜こぶ。

田植の終った水田には除草剤を使わない代りに、合鴨が放された。水田に鴨を入れると水を濁すが、濁すことによって雑草が生えなくなり、害虫もいなくなるという。稲の生育もよくなり、丈夫になる。

参加した親子は、一家がこの合鴨一羽の親となり、それぞれの鴨たちを見守り続けた。特に研修のない日でも自分たちの合鴨が気になって、田んぼを訪ねる親子が何組もいたという。

田植の後には稲の生育や、どの位穂が出てきたか等を観察するが、「日曜農学校」の研修は米づくりだけではない。季節に応じてとうもろこしや花のポット植え、いちご狩り、じゃがいもの収穫、乳牛見学、そば打ち講習等と、内容は実に多彩。丸森町の農業と食文化・暮らし全般を広く知ってもらおうという幅広いプログラムになっている。

脱穀から精米へ

さて、「日曜農学校」最終日となったこの日の研修は、脱穀ともみすり。前回自分たちで刈り取ってハセかけした稲の束の前に、全員集合して、まずは記念写真を一枚。どの顔も嬉しそうだ。半年前に田植をした田んぼで、いよいよ今日は〝お米〟を収穫できる。

清流88クラブの小野さんと星さんが「ハーベスタ」と呼ばれる脱穀機を運んできて、スイッチを入れると、バタバタと地鳴りのような轟音が響き渡る。脱穀機の使い方を小野さんたちから教わり、参加者の男性たちが稲の束を機械に入れていく。女性や子供たちはハセかけから稲束をはずし、せっせと運ぶ。

いなごを追いかける子供、畔道に咲いた花を摘む母娘、脱穀機から吐き出される稲ワラのクズが、田んぼ一面に飛び散っていく。そ

これから脱穀をする田んぼで、全員そろって記念写真。

▲農家の主婦たちが作ってくれたお雑煮も大人気。

▲脱穀したモミを袋に。父も子も真剣そのもの。
◀精米したお米を運ぶ子供。うれしい重さに「ひえ～」。

の中を走り廻る子供たち。落ち穂を拾い、感慨深げにジッと見つめる父親。

体験しなければきっと解からなかった一粒の米へのさまざまな想いが、それぞれの参加者の胸に溢れていたことだろう。

脱穀の後は小野さん宅の作業所に場所を移して、もみすりが始まった。もみの水分を計り、程良く乾燥したものをもみすり機にかけて、いい米とくず米とに選別する。作業所の外に出来たもみがらの山に登って、子供たちは大はしゃぎだ。この後は星さんに精米をお願いして、一行は昼食会場となる町民センターの広場へ向かった。

▲修了式。一家族ごとに修了証とお米5キロが贈られた。

▲昼食のもちつきも、みんなで参加した。

滞在型市民農園も建設中

町民センターでは農家の主婦たちの手によって、昼食の準備が進められていた。大鍋で煮える雑煮のおいしそうな匂いが広がっている。「皆が野菜を持ち寄るので、予算はいつも余ってしまうんですよ」と佐藤ひさこさん。

外の広場ではもちつきが始まった。参加者の子供たちが順番でもちつきを体験させてもらっている。祝い事があると、この地方では昔からもちをついた。今日は「日曜農学校」での初めてのお米の収穫に「ご苦労様」の気持をこめて、丸森町からの心づくしのもてなしだ。

これまでにも五目おこわやそば、いも煮鍋など、参加者たちは丸森ならではの郷土食を季節に応じて楽しんできた。「今日は何が食べられるの？」と毎回子供に尋ねられたと苦笑する参加者もいた。

昼食の後は、町長も参加しての修了式となった。一組ずつ家族の名が呼ばれ、町長から修了証と収穫したお米5キロが手渡される。自分たちが植え、自分たちが刈り取った正真正銘〝わが家ブランド〟のお米だ。

「お米の食べ方が変わるでしょうねェ」と参加者の刈谷彰子さんがしみじみと言った。

「いつも製品でしか見えなかったものの陰にある大事なものを実感できました」とは福田豊さん。

「こんなことがなければ丸森という町を知ることはなかった」「農家におじゃまして一日過ごさせていただければ、又楽しいと思う」「いつかは住んでみたい町になった」「何となく見ていた畑も、黒いビニールは雑草を防ぐためだと分かり、家庭菜園で役立った」等々、さまざまな意見や感想が参加者から寄せられた。

野菜づくりなどの指導にあたってきた農協や生産者の人たちからも「ゆくゆくは一家族を一軒の農家で預かり、一緒に作業するのもいいかと思う」という前向きな発言がでた。

休耕田を野菜づくりに貸してほしいという都市住民からの要望もあり、検討の課題にはなっているが、畑に出るイノシシの番をしなければならないなど、人手の点などで十分な対応にはまだまだ問題が残されている。

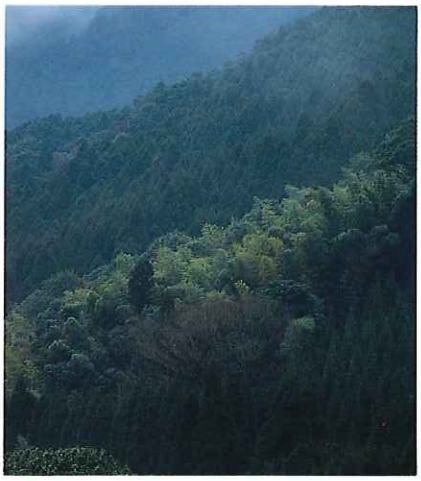
しかし、町が都市の人に認知され、少しでも多くの人が訪れてくれることは、何よりも町の活性化につながっていく。

丸森町では現在、滞在型市民農園も建設中だ。宿泊休憩施設と菜園つきのクラインガルデンスタイルで、6区画と12区画。平成12年のオープンをめざしている。センターハウスとゲストハウスも併設され、地元農家が農業指導にあたるというこの市民農園が丸森町の新たな交流拠点となる日も遠くはないだろう。

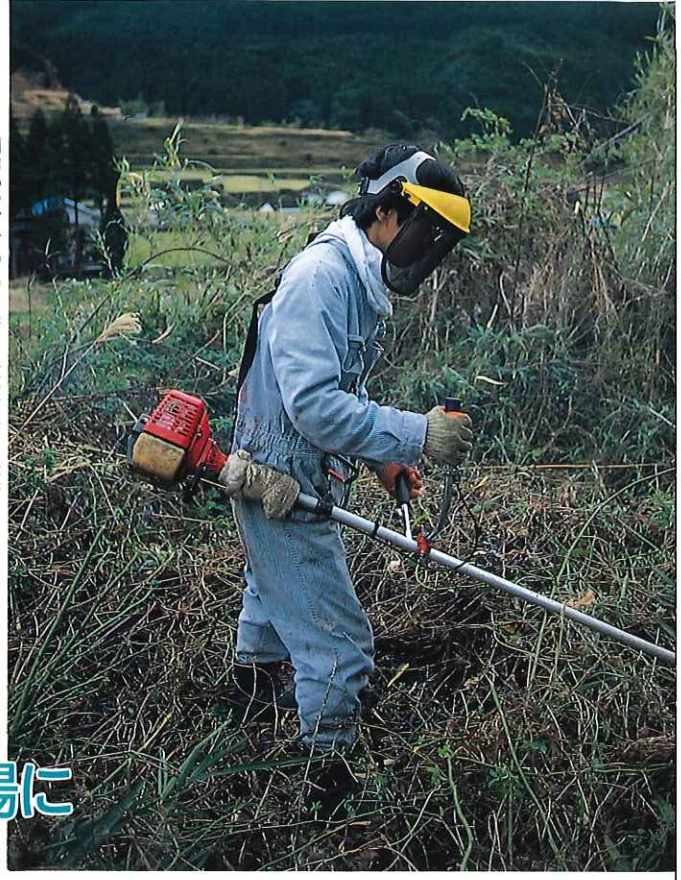
● 丸森町役場農林課☎0224(72)2111

文／金山淑子　写真／小林 恵

建設中の滞在型市民農園。



▶「水源の森づくり」が行なわれている山林。



▶棚田のヤダケの掘り起こし作業をする長溝雄二さん。

水源の森づくり、棚田の再生
自然の資源を活かして交流の場に
水俣市ふるさとセンター・愛林館（熊本県水俣市）

水俣市は、人口2万8000人。四季を通じ渇水することもなければ、大雨が降っても濁ることのない久木野地区の寒川水源を源とした久木野川が市域の中央部で水俣川に合流し、そのまま不知火海に注ぐ。海岸はリアス式海岸で、緑と四季おりおりの花木に彩られ、日本の地中海といわれるほどの自然景観の美しさはすばらしい。

そんな水俣市でも、かつて世界でも類例のない水俣病という公害が発生し、大規模な環境破壊と健康被害を引き起こした。

今、水俣市では、公害で崩れかかった地域共同体の絆を再び強くしっかり結びつけるため、市民挙げて自然資源を生かしつつ人間本来の環境創造を目指している。その拠点の一つが「水俣市ふるさとセンター愛林館」である。

活動のテーマは「エコロジーに基づくむらおこし」

水俣市街地から山間部へ車で20分、水俣川の支流である久木野川源流域で、日本の百選に選ばれた美しい棚田が連なる久木野地区。人口1294人のこの集落に、愛林館は5年前に建設された。

全国の公募者から選ばれて、家族一緒に東京から就任した館長の沢畑亨さん(38)は、「エコロジーに基づくむらおこし」を活動のテーマとし、継続的な活力ある交流事業を行なっている。自らの暮らし方も、エコロジーに基づく暮らしの実践だ。地元の農家から借りた棚田で、アイガモを放して稲を作り、家庭用野菜は庭の畑でまかなっている。

「エコロジーの要素は、風土、循環、自律である」と言う沢畑館長は、地元に以前からあった自然の資源を活かした交流事業に取り組んでいる。

年間での三大イベントは、「水源の森づくり」、「働くアウトドア」、「ししなべマラソン大会」である。

「水源の森づくり」は、杉やヒノキを伐採した国有林の跡地に、シイやカシなどの照葉樹を植えようという試みだ。特に費用を使って呼びかけているわけではないが、昨年4月の植林の時には、水俣市民も含めて4日間で約100人の人が訪れた。参加者は、熊本市周辺からが多い。これまでに9ヘクタール、約1万8000本の苗を植林した。北海道の佐呂間漁協婦人部が20年以上前から行なっている100ヘクタール植林には追いつけないだろうが、国内二番目の水源の森を目指している。

「山の人間が本気になれば、どんどん植えるんだぞというところを見せつけないと」沢畑館長は、持続することの大切さを強調する。

久木野地区の寒川水源では、一日3000トンの水が湧き出している。この水を守るために水俣市民は意識的に山を守っていこうとしている。

◀視察にきた鹿児島県鹿屋市森林組合の役員達を案内する沢畑館長（中央）

▲愛林館の建物。▼愛林館で憩う視察団。

▶熊本県産の小麦を使ってパンを作る地元のお母さん達。

▶「ここでは人間全体と付き合っていける」と長溝さん。

もう一つの交流事業「働くアウトドア」では、水俣市有林の下草刈りと20年生のヒノキを除伐すること。地元でただ一軒の専業林家吉井和久さん(38)に作業の指導に来てもらう。吉井さんは機械の使い方や作業の手順などを丁寧に説明していく。仕事の合間、町からの参加者に林業の現状を話せるのが、林家にとっても精神的な支えとなる。参加者の多くは、20歳代の女性と60歳代の男性だ。除伐した木の売り先がなくなったために、除伐費用が出なくなり、山は荒れていた。重労働なのである。

「山仕事に素人が役立つのだろうか」と、疑問が湧く。「三日もすればものになります。仕事は遅いけど、丁寧ですよ」と、沢畑館長は、たまたま熊本市から手伝いに来ていた長溝雄二さん(27)を紹介してくれた。

自分にあった暮らし方を探しに

間伐材を炭にするために、移動式炭焼き窯で炭焼き教室を開催した平成10年11月、長溝さんは新聞記事を見て、初めて愛林館を訪ねた。昨年1月に、本格的な炭焼き窯をつくった時に再び参加。今では年に数回仕事に来ていて愛林館のアルバイトとして、時給680円を貰っている。

長溝さんが、今回働いているのは、人手がなくなり約20年前から放置され、ヤダケのヤブになってしまっていた棚田の切り開きだ。

切れども切れども、ヤダケの壁が続く棚田で一人、草刈り機のエンジン音を響かせて仕事をする。今のまま放置すれば、崩壊する棚田だが、ここで一旦保全すれば、将来も使えるし、地元農家の耕作意欲も強まってくるだろう。

「日本のスピードは、早すぎると思うんですよ。自分のペースで仕事をしていると、少しずつ先が見えてくる。最初から全体が見えなくてもよいのだなと教えられます。仕事を中断して、寝っころがって空を見ていると、気持ちいいですよ」

長溝さんは、都市にはない暮らしのスピードから、自分にあった暮らし方を会得したようだ。

「地元には、生活の知恵というか、技持ちが多いんですよ。ここにいると、職業とかではなく、人間全体と付き合っていけるような気がします」

自分の人生を模索してる彼には、人との出会いも魅力のようだ。

最初に「働くアウトドア」の企画をした時、参加者は僅か2人だった。しかし、沢畑館長は、至れり尽くせりは疲れるので、「至らない尽くさない」交流事業をやってきた。

「長溝さんのように、自分で考えてやってくれる人は続けて来てくれますが、不満のある参加者もいるでしょうね」と、沢畑館長。持続のために無理はしないと言う。

水俣市からの補助金、愛林館で作った加工食品などの売上金、年間1100万円の一部、それに自分の講演料も「水源の森づくり」や「棚田保全」に注ぎ込む。

あくまでも環境と風土に根ざした暮らしや活動中から、参加者は学んでいくのである。

地元の人の知恵と労働力を活かして

活動の三本柱として、①食 ②環境教育 ③多彩な暮らし、を立てている。久木野産の米、麦、大豆を使った味噌、九州産の小麦粉のパン、無農薬の梅を天然塩でつけた梅干しなどが①の食である。②の環境教育に、「水源の森づくり」や「働くアウトドア」がある。③の多彩な暮らしには、しし鍋マラソン、豆腐教室、炭焼き教室、コンサートも開かれる。

すべての活動に、地元の知恵と労働力が生かされている。そこには町から消えてしまったエコロジーに基づく暮らし方がある。もともとここにあった資源や自然の価値を見直して大切にする。そこに都市の住民が共感して集まってくる鍵があるようだ。目の当たりに現場を見た行政担当者は、「こんなにきつい農業の仕事をする人がおるとやろか。でも、こうした交流を通して一人でも二人でも一緒になって久木野を支えていけるようがんばってほしい」と言っていた。

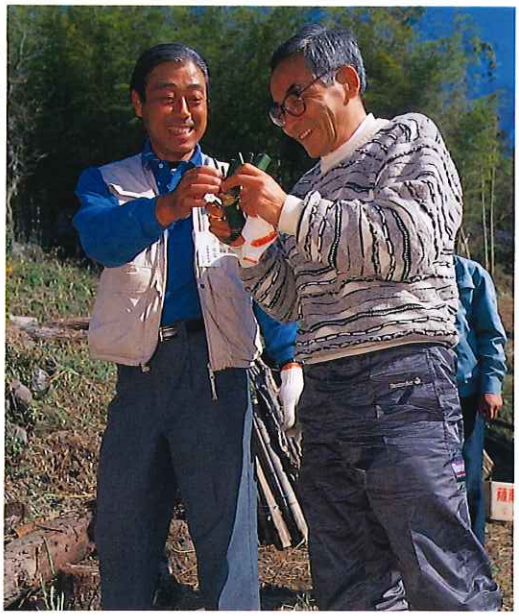
数は少ないかも知れないが、来る人々は確実にいるのである。

愛林館で最近始めたばかりの企画に田援計画「大豆耕作団」がある。休耕している棚田で、大豆を作るための出資者と労働力を募集中である。

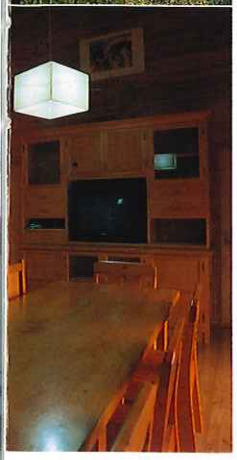
愛林館の交流事業は、華々しくはないが、コンセプトをしっかり立て、持続することの大切さを示している。

●愛林館☎0966(69)0485

▶父親と一緒に参加した女性は、竹炭づくりに大喜び。



▶4回目参加の下川さんと役場職員。竹の輪切りで猪口造りを楽しむ。



◀津江杉で建造した「森の館」。杉の香と木のぬくもりに満ちた内部(下)。

「夢」を買う。そして夢の実現へ向けて——

「家一棟分ふるさとの森づくり事業」(大分県上津江(かみつえ)村)

深い緑色の海原に見える杉山の中、珊瑚礁のように鮮やかな黄金色のケヤキが美しい。まだ秋の気配が残る昨年11月下旬、大分県日田郡上津江村では、「家一棟分ふるさとの森づくり事業」の一環として、第14回「森の集い」が開かれた。

「杉の香りのするマイホームを自分の山林でとれる木材で建てよう」をキャッチフレーズに、井上伸史前町長のアイデアで昭和57年から始められた交流事業である。昭和61年の第三次募集までに、全国から167人が会員となった。

上津江村は、総面積の95%が森林である。日本五大美林の一つ、津江杉として知られている上津江村の村有林。その一部を家一棟分として60万円で分譲し、20年後に杉材30㎥を現物で提供することになっている。杉材30㎥といっても具体的なイメージが湧かないが、10トントラックで約3台分の量になっている。

そこで、平成元年にはモデルハウスとして「森の館」を建設した。およそ160㎡の外壁から内装まで杉を使った「森の館」は、玄関を入ると目の前に、天井が高く解放感に溢れた20畳ほどのリビングルームが広がる。これがわずか60万円分の杉材で出来るのかと思えるほど立派だ。年間、15万人が見学に訪れ、交流の場にもなっている。

粋な「夢」を買いたいから参加

11月20日(土)の昼過ぎ、集合場所の上津江村中央公民館の二階は、まだよそよそしい雰囲気が流れていた。福岡県大牟田市から一人で参加の池末利子さん(75)に、「森づくり」に申し込んだ気持ちを聞いた。

「現在の家は、大手メーカーのハウスなんです。合理的だけど味がない。敷地に余裕があるので、小さくてもログハウスが出来ないかなあと、応募したんです。第三期の森ですから、伐採まであと七年あります。生きているかしら、86歳でログハウスの住人」と、配られた資料に目を通しながら笑う。

第14回「森の集い」に参加を申し込んだ35人の多くは福岡県からだ。今回最も遠く、名古屋市から参加している田中克子さん(52)は、「夢買いは少々好きなもんで、20年後のイメージはないまま申し込んだんです。負担は小さく、大きな夢を買えるのがいいと思いました。自分の家を造りたいより、村の呼びかけに粋を感じたんです」

と、「夢買い」であったことを強調する。

開会式の後は、さっそく村内見学。「杉の香りがいいね」「年輪が美しいね」などと語り合いながら、第三セクター㈱トライ・ウッド製材工場内を歩くと、伐採の時が、身近に感じられるようだ。「家一棟の森」伐採の際には、この工場で乾燥と製材をすることになっている。参加者の誰もが、先ほどまでのよそよそしさは何処へやら、同じ夢を持つ仲間同士の打ち解けた表情になっている。

山小屋風のバーベキューハウスで開催された夜の交流会では、上津江村民を交えて、一気に親戚付き合いの心情まで達したようだ。地元婦人会の生活研究グループが準備したバーベキューと煮シメ、ダゴ汁がひと役かったことは言うまでもない。

農家の協力で竹炭づくりや田舎料理を体験

翌朝は日の出前から、宿舎となったペンション丸太ん坊前の広場を散策する多くの会員の姿があった。「静かすぎて寝れなかったですよ」などと、満足そうに挨拶している。

2日目はまず、昨年2月に稚魚を入れたばかりの「森のひらめの養殖場」を見学。学校

◀バーベキューハウスでの交流会。

◀農家の主婦から田舎料理を習う。

◀14年間参加している田中好美会長。

の跡地を利用して、閉鎖循環濾過方式で「ひらめ」を養殖しようというのだ。森で養殖という突飛なアイデアが受けて、すでにマスコミで話題になっている。

「うち位の規模の行政だったら、前例がないこともやっていけるんですよ。やらなきゃいけないというか。行政が夢じゃいかんでしょうけどね」

案内役を務める上津江村役場企画観光課の田辺慎一郎係長(45)は、先進的なアイデア行政の自信をのぞかせる。

午前中の体験学習は「竹炭づくり」と「田舎料理教室」が行なわれた。竹炭づくりは、地元の農家森下利雄さん(68)が指導しての共同作業である。孟宗竹を長さ一mの長さに切って、縦に割る。それを束ねて炭焼き窯に詰める。身体を動かしながらの交流は、親密感が深くなる。

細い竹を見つけて、輪切りにしていた下川滿之さん(63)は、4回目の参加だ。

「猪口を造りよるですよ。上津江の思い出です。息子が酒飲みやけん、お土産を作りよっとですよ。その息子がまだ小さかった頃、この川で魚を釣ったりしたんですけど。職場と上津江は変わらん位の長い付き合いです。私は、平凡なサラリーマン、退職してこういうところに住めたらいいなと思っています。それが夢ですよ」

しみじみとした口調で、下川さんも夢買いであった、と言う。

自分の家を自分が育てた材木で建てる。豊かな自然と温かな人情に囲まれて暮らす。平凡であるかも知れないが、誰もが共感できる夢の実現が、この「家一棟分ふるさとの森づくり事業」にはあるようだ。

隣町の日田市から参加している田中好美さん(77)は第一次会員。14年間、「森の集い」を一度も欠かしたことがない。会長としてまとめ役も努めてきた。

「夢の実現の段階ですから、宅地の選定はもう済ませています。設計図に沿って製材してもらい、日田の大工さんを連れてきて、切込みまでしてもらうつもりです。森づくり事業のおかげで、心の繋がりが出来たというか。妻の次ぎに愛するのは上津江です」

3年後は第一次会員の木材が誕生

人口1300人余り、大分県内で最も小さな村は、今や都会の人々の夢を実現する場として、なくてはならない存在となった。

平成3年の台風で大きな被害にあった第一次募集の分収林は、隣の中津江村に代替林を購入した。会員の死亡に伴う相続のトラブルや会員の住所移転など、長い期間には予想を越えた困難もあった。しかし、「森の集い」に参加できない遠方の会員のために、福岡、東京、名古屋、大阪、広島で「出前交流会」を開催するなど、信頼関係を築く努力をしてきた成果なのか、今回参加した会員の中に不満の声はなかった。

「前村長のアイデアで始まった森づくり事業のおかげで、それまでは日田の近くとしか言えなかったのに、今では『上津江村を知らないんですか』と、言えるようになったそうです。心の過疎というか、劣等感は、行政のやり方で解消されていくなと思いました」

参加者から聞いた話だ。17年間、行政と村民が一体となって森づくり事業を継続し、こんな話が聞けることが、すでに成果といえる。いよいよ3年後に迫った第一次会員の分収林23ヘクタールを伐採する時の準備として、平成12年度予算には、「家一棟分ふるさとの森」調査費が盛り込まれた。

昼食の後、村がお土産に準備した山の幸を提げて帰路につく会員の後ろ姿には、帰省先から都会へ戻る時の、寂しさと温かさがあった。

20年間経って伐採したら終わりじゃなくて、村と繋がる関係を続けたいと、森づくり会員の中から声が上がった。次世代の「森づくり事業」構想は、都会の声に励まされるようにしてすでに始まっている。

●上津江村役場企画課☎0973(55)2011

文・写真／芥川　仁

▲参加者全員が集合して記念撮影。

泊って、体験して。遊び心いっぱいの山里

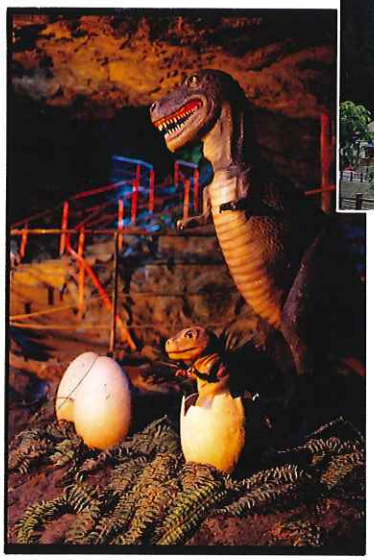
和歌山県花園村

▲子供交流会で間伐、技打ち作業を体験。

▲こんにゃくづくりに挑戦。

▲夜はバーベキューに舌づつみ。

▼恐竜館内部



▶恐竜ランド

明治22年の町村制で誕生以降、変更や統合のない花園村は、面積47・44㎢、人口659人の小さな村。その歴史は古く、約1150年前に弘法大師が高野山を開創した折、その弟子たちによって拓かれ、明治に至るまで高野山金剛峯寺の寺領として保護されてきた。そのため高野山関係の史跡文化財が多く、「御田の舞」「仏の舞」等、国指定重要無形文化財の民俗芸能がいまも伝承されている。

昭和47年に「観光立村」をかかげ、離村者の里帰りと住民のコミュニケーションの場として、ふるさとセンター「ねむの木」を建設、52年には大阪府守口市との共同整備により「花園守口ふるさと村」を開設、友好姉妹提携を結んだ。しかし年間を通しての利用が少なく、交流活動も活発でなかったため運営赤字になっている。

平成元年より両市村の小学生による交流会を実施してきたが、平成5年度より林業構造改善事業の一環として、都市の子供と山村の子供が一堂に会して自然の中で体験学習する「都市と山村の子供交流会」を実施している。

観光・交流施設としては、全国的にもいち早く昭和57年に生産物直売所を開設した他、金剛寺緑地広場、「山に描く花園の夢」大壁画、お迎えの庭などを開設、平成4年には小原洞窟に「恐竜ランド」「恐竜館」をオープンした。

迷路のような洞窟へ足を踏み入れると、突然現われる恐竜。音声や照明で太古の昔にタイムスリップする。本物の恐竜の卵も展示してあり、古生代を体験学習できる子供たちに人気の資料館になっている。

この恐竜館の開設により、昭和60年代までは2万5000人前後だった観光客が、平成4年には約16万人になり、日帰り客が急増した。しかし現在は、恐竜館の見学者がブームが去って減ったこともあり、日帰り客は1万人程度となり、代わって宿泊客が安定的な伸びを示している。

花園町の宿泊施設は、「ふるさとセンター」、守口ふるさと村コテージをはじめ、花園温泉、民宿、キャンプ場（4カ所）などがあり、平成10年にはキャンプ場利用者も含めて2万4383人が宿泊している。

その結果、村内日帰り客を含めて年間4万人余が花園村を訪ねている（平成10年）ことになるが、平成4年の約12万人、8年の約8万人に比べると大きく落込んでいる。

そんな中で、好評を博しているのが、毎年8月末に実施される花園村と守口市の小学4～6年生による子供交流会「紀の川自然に親しむ会」の指導を受けながら、コンニャクづくり、アマゴ釣り、間伐や枝打ち等の林業体験、ネイチャーゲーム等を楽しむ。昨年は42名の児童と10名のリーダーが参加した。

都市の子供達は、森林の持つ機能や保全していくことの大切さを体験学習し、地元の子供はふるさとの良さを再発見する機会となっている。

今後の課題は、この交流会が学校行事ではなく子供達の任意の野外活動とされていることから日程の調整やリーダーの確保が大変であること。

また、豊かな自然環境と古い伝統文化を残している花園村だが、一方で道路網にはまだ問題点も多い。冬季の積雪に対応できる地蔵峠トンネルの早期貫通、大型バスが入れる村道の調整等が重要課題になっている。

ふるさとセンター「ねむの木」

カブトムシ自然王国に年間20万人

福島県常葉（ときわ）町

◀▼中野区中学生の農業体験学習

▶カブト屋敷全景
▼カブトムシ自然観察園内部

カブトムシは子供達の人気者。比較的飼育しやすいことから各地の農家が養殖し、全国の市場に50万匹が出回っているともいわれる。

従来活用されることなく捨てられていたカブトムシを、姉妹都市提携している東京中野区の子供達にプレゼントしてみては、という思いつきではじまったのが常葉町の「カブトムシで町おこし」大作戦だった。

昭和62年「常葉町カブトムシの会」を結成、㈱西友との共同企画でカブトムシの養殖がスタート、「カブトムシふるさと便」として初年度2500匹、翌年度3000匹を発送した。都市からの反響は大きく、63年には「カブトムシ自然王国」の独立宣言をし、同年6月4日を〝カブト元年〟としてカブトムシ大作戦が本格化した。

その拠点となる施設として、〝自然観察の森〟を63年に、自然の中でカブトムシの生態がつぶさに観察できる日本初のドーム「カブトムシ自然観察園」を平成元年に建設した。続いて世界の甲虫の標本200種、3000匹を展示する「カブト屋敷」、阿武隈の山並みを一望できる高原に子供から大人まで楽しめる多彩な遊具施設の「こどもの国ムシムシランド」を開設した。

カブト屋敷には世界一大きいカブトムシ、ヘラクレスオオカブト、最も美しいといわれるクワガタ、ニジイロクワガタなどの標本もあり、マニアの見学者も多い。

カブトムシはナラやクヌギの落葉樹を好んで産卵する。常葉町では葉たばこ栽培にこれらの木の葉の腐葉土を使ってきたが、たばこ栽培の時には殺菌、消毒するため、カブトムシの幼虫の大半は死滅してしまった。幼虫育成は、農薬や消毒を減らす有機農業への推進にも役立っており、幼虫販売による農家収入は約300万円にもなっている。

宿泊、研修施設の利用者も多く、毎年20万人が訪れるようになった。「カブトムシ自然王国・常葉」の知名度は高まり、Uターン・Iターンなどの効果も出てきている。

しかし、カブトムシの成虫は夏1〜2週間しか生きられない短命で、通年性がないのが問題点。そのため施設内では通年性へ向けての工夫や研究を行っているが、11月から3月までは閉館。短命のカブトムシをカバーするものとして3年以上は生息するオオクワガタの繁殖にも力を入れているが、オオクワガタは養殖がむずかしく、オス・メス共に腐葉土にもぐっているため子供達に見せるのが結構大変でもある。逆にいえば、子供達が玩具感覚で生き物にふれるのではなく、命の大切さを学び愛着を持って接することを学ぶ機会となるだろう。

交流活動としては、カブトムシのふるさとマレーシアへ探検隊を出した（昭62）のが契機で、町では平成元年より毎年小学生を5〜20名ずつマレーシアへ派遣、平成5年にはマレーシアのスンガイリマウ小学校児童を招待した。同小のあるスンガイバザー町とは7年に友好提携調印、カブトムシを媒介に子供達の親善交流をめざしている。

一方、姉妹都市中野区との交流はすでに20年に及んでおり、町内山根地区にある中野区立青少年自然の家には、自然とのふれあい、農家との交流をめざして沢山の青少年が訪れる。5月から夏休み前まで、夏休み後から10月中旬までは中学生が3泊4日で来町、うち一日は農家で農業体験をする。来町した中学生（70〜150人）は5、6人ずつに別れて各農家で田植、稲刈り、牛の世話、葉たばこ植付け等を体験学習し、昼食をごちそうになる。農家の人達のやさしさや苦労がわかると生徒達にも好評だ。

小学生は夏期林間学習で2泊3日で来町。カブトムシ自然観察園見学、登山などの他に、最近は農家のお年寄りに協力してもらい竹細工、わら細工教室も開かれている。

都市の子供達との交流は、農家や高齢者にとってもはげみとなり、地域の魅力を再確認するために役立っているようだ。

常葉町役場総務課 ☎0247-77-2111　カブト屋敷 ☎0247-77-2070

「花祭り」の保存継承を通じて東京と熱い交流

東栄町御園（とうえい）（愛知県）

▲御園の人達の囃子に合せて舞う子供達。ホールは祭り会場に変身している。
◀上／幼稚園児らによる「舞上」
下／毎年御園でも踊ってきた中学生。

▼御園花祭り保存会会長清水さんの舞。

昨年12月、東京都東久留米市滝山の地域センターで第7回「東京花祭り」が開催された。3階ホールは神事にふさわしく、東栄町御園の人々が持参した竹や奉納用の飾りが配置され、中央には父母手作りの湯釜のレプリカが置かれている。薪が燃えて湯がたぎる本場の祭りの臨場感はないが、ホール内は見事に祭り会場に変身している。

「花祭り」は鎌倉時代に山伏や修験者によって奥三河、天竜川水系に伝えられた700年の伝統を持つ祭りで、国の重要無形文化財に指定されている。東栄町では11月から3月にかけて各集落ごとに開催されているが、子供が減って、花祭りのハイライト「花の舞」を行なうのがむずかしい地区も出てきた。

御園は東栄町の中心部から車で北へ30分ほど入った山麓にある62戸の集落で、斜面を利用して茶畑や棚田が広がる景勝地。花祭り保存には最も熱心に取り組んできた地区だが、「花の舞」を舞う子供が足りない。

その話を聞いた民俗舞踊研究家の人見勇三夫妻が現地を訪れて、東京で何とか花祭りを支援したいと仲間に話を持ちかけた。小学生の多い団地でもあり、伝承志願者はたちまち30人に。「東京花祭り保存会」を作り、親子で御園へ出かけて練習にはげみ、同地区の祭りにも参加するようになった。

「せっかくなら、この素晴らしい民俗芸能を東京人にも見てもらいたい」と7年前から東京でも祭りを開催、長年の努力が実って平成10年には第一回「日本標準教育賞」を受賞している。これは花祭りの保存継承の実践活動とともに、人と人との結びつきを深め、地域での人間形成に大きな役割を果たしていることが評価されたもの。

月一回は親子で練習会を開いている他、祭りが近づくと、東京在住の御園の若者が毎土日曜日に指導にかけつける。

第7回東京花祭りは、午前11時、御園花祭り保存会の若者4人による「四つ舞」、次いで保存会会長、清水晃氏の「ばちの舞」で幕があいた。さすが本場の人達が幼い頃より習得してきた舞は優雅さと威厳に満ち、日舞の舞台を見ているようだ。

続いて東京側のベテランが「市の舞」「五式三番」を舞い、そのあとは子供達による「花の舞」が次々と演じられる。

7年前、「花の舞」を御園で初めて踊った小学生もいまは中学三年生となったが、高校受験期を控えながらも熱心に練習に励んできた。

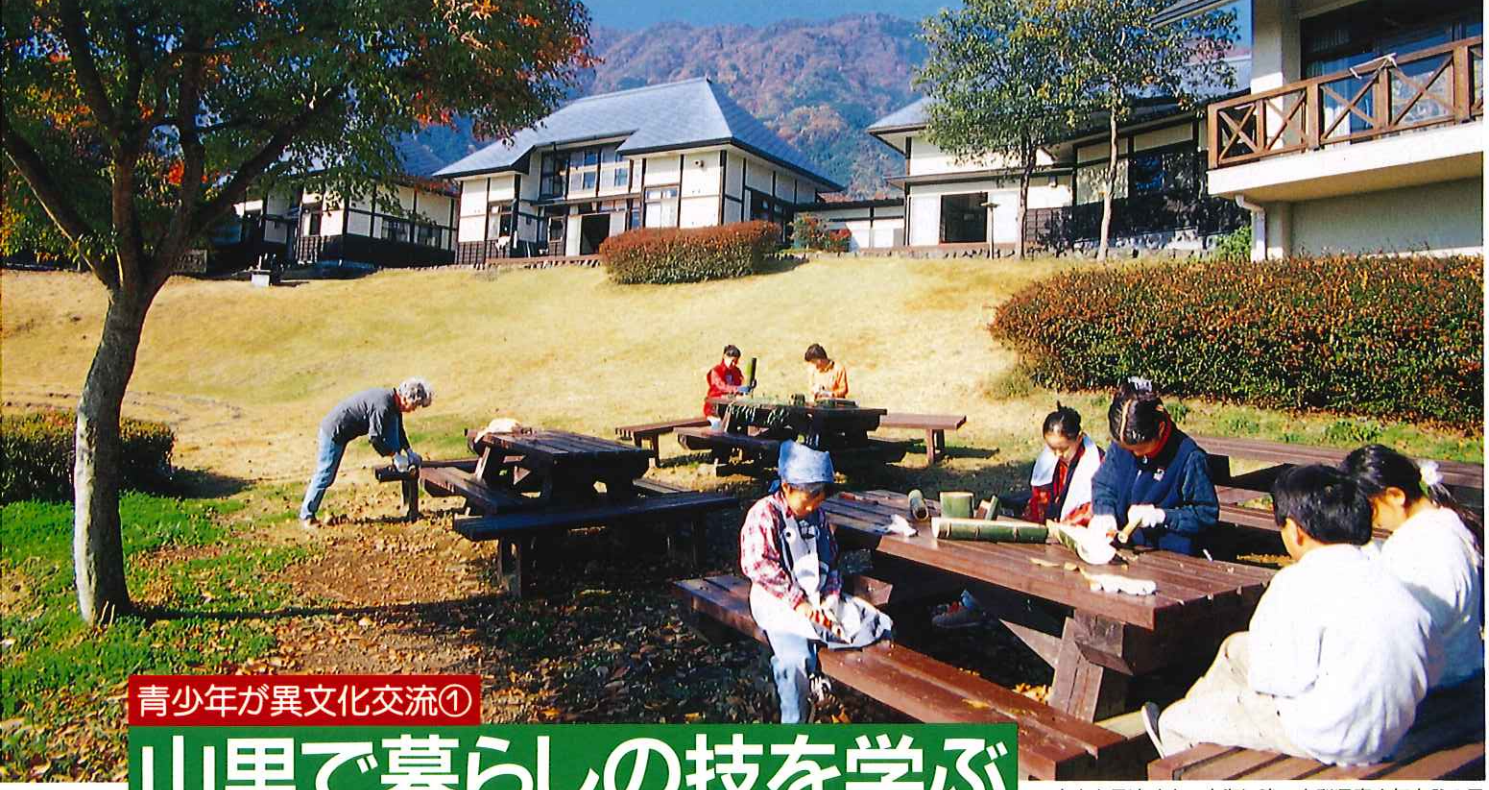
東京会場の人気者は幼稚園児らによる「舞上」という舞い。お母さん達が手作りした細と真っ赤な布を組み合せた衣裳がよく似合って何とも愛らしい。この舞いは御園の花祭りにも披露され、お年寄り達は涙を流して喜んでくれたという。

午後3時には待望の赤鬼が登場して会場を盛り上げたが、残念ながら酒等が御法度のせいもあり、観客と演じる人との一体感はいま一つなく、御園の長老もそれを残念がっていた。

ところで、一二年前に指導にきていた清水靖さんは大学を出ると御園へ帰ってJAに就職、いま指導に当っている尾林暁史君も大学を出たら御園へ帰るという。

「東京の人達が御園を第二のふるさとにして愛してくれている。我々もそれに応えて地域づくりを担っていきます」と言っていた。

御園花祭り保存会・清水さん宅　☎05367(6)0283



富士を見渡す山の中腹に建つ山梨県青少年自然の里で暖かな秋の陽をあびてのモノづくり。

青少年が異文化交流①

山里で暮らしの技を学ぶ

山梨県青少年自然の里（山梨県中富町）

仄暗い食堂に小さな明かりがいくつも灯って心和む夕食が始まった。食卓に並ぶそばや豆腐、そして明かりを灯しているローソクは、すべてその日の参加者たちが作ったものだ。地元の集落のお年寄りや工芸家から、暮らしの技や工夫を学ぼうと企画された一泊二日のこの催しには、県内外から40人の参加者が集まった。

一泊二日の体験講座

JR身延線、甲斐岩間という小さな駅に降り立ったのは、11月半ばの穏やかな午後。この日の催しを企画した山梨県青少年自然の里までは、ここからクルマで20分程の距離だという。

駅前の町並みを過ぎて富士川を渡ると、クルマは林道のような山道をグングンと登りはじめた。紅葉に染まった山肌が、右に左に迫っては遠のいていく。そんな山道を15分も登っただろうか。視界は突然に開け、民家のような佇まいの青少年自然の里の建物が見えてきた。

木造平屋の建物が何棟も連なった宿泊棟は、屋根も外壁も周囲の自然と調和して、平須と呼ばれる一帯の集落に美しく溶け込んでいる。従来の公共施設とは趣きの違う、素朴さと重厚さを併せもった独特の空間が広がっている。

フロントロビーで待っていると所長の丸山優さんが現われた。一泊二日の体験イベントの、開講式がちょうど終ったところだった。参加者40名。子供を含めた17家族が甲府市周辺からやってきている。県外からの参加者もいる。

今回の体験講座は花ローソク、竹の器、そば・豆腐づくりと、内容も盛り沢山だ。この企画はここ青少年自然の里のテーマでもある「自然の体験、味の体験、手業の体験を通して、この地域の素晴らしさを発見してほしい」というコンセプトから生まれたものだ。

所長の丸山さんは言う。

「ここを訪れる人にいちばん楽しんでほしいのは、平須というこの集落の暮らしそのものなんです。それはこの雄大な自然だったり、平須の昔からある郷土食だったり、暮らしに根づいたさまざまな技術など。そういうものを体験しながら何かを得てもらえれば、と思うんです」

確かにこの青少年自然の里は宿泊管理棟、和紙工房、陶芸工房、水車小屋、炭焼き園、キャンプ場などの施設が、集落の中に点在していて、集落の生活との一体感がそこここに感じられる。

宿泊管理棟から陶芸工房への途中には、畑があり、墓所があり、畑仕事のお年寄りの姿なども自然に目に入ってくる。地域の人たちの暮らしの一端に、施設のあちこちで触れることができるという仕組みになっているのだ。

「こんなローソクが作れるなんて」

工房では花ローソクづくりが始まった。ローソクを花びらの形に作るこの技術は、この地方伝来のものではないが、近在に住む工芸家藤本光三さんの指導によって、今日は皆でこのローソクづくりに挑戦することとなった。

竹の器づくりの説明を受ける参加者たち。

▶夕食のテーブルに並んだ、そばと豆腐と花ローソク。すべてこの日の手づくりだ。

藤本光三さんはヨーロッパでこの技術を習得。今では光を使ったコンサートの企画や、食物栄養学を学んだ経験を活かして、光を使った食卓の演出、食の提案など、広い分野で活躍している人だ。最近ではローソクへの想いを込めて「光芸家」と名乗るようになったという。

「今、家庭の食卓がどんどん寂しいものになっていますね。食事は教育も含めて、生活の中心にくるべきものです。ヨーロッパでは食卓によくローソクを灯しますが、美味しさを演出するにはローソクの光が一番効果的だと思います」と、藤本さん。

参加者たちはいくつかのグループに分かれて、ローソクの材料となるパラフィンワックスを溶かし始めた。子供も大勢いるので、やけどや火災にはくれぐれも注意しなければならない慎重な作業だ。ワックスが溶けたら、クレヨンを削り入れて色付けをする。ワックスが冷めて固くならないうちに形を作り、芯を入れれば出来上り。

作業台に赤や青の花びらのようなローソクがいくつも並んで、子供も大人も大喜びだ。作業の各工程を、自然の里の職員たちが手際よくサポートしていく。

大月から一人で参加したという江本葉香さんは、白髪の似合うモダンな女性。

「去年の陶芸の講座にも参加したんですよ。過疎地が私の憧れなの。不便をもっと楽しみたいですね」と、完成したローソクを前に嬉しそうに話す。

「こんなローソクが自分で作れるなんて」という声も、あちこちから聞こえてきた。

大きなガラス窓の向こうには紅葉の山々と、まっ白に染まった富士の頂きが見渡せる。ヤマガラが餌を啄みに、窓辺に寄ってくる。自然の里の午後は、ゆっくりと時を惜しむかのように過ぎていく。

講師は集落のお年寄りたち

体験講座の後半は、そば・豆腐づくり。参加者たちはふた手に分かれて、そば組・豆腐組と、それぞれの場所へ移動した。

豆腐づくりを指導するのは、集落の主婦中沢カノエさん(69)と遠藤ますえさん(59)の二人だ。

「ここいらでは昔から石臼で大豆を挽いてね、どこの家でも豆腐を作っていたんですよ」と、中沢さん。

前日から水に浸けておいた大豆を、参加者たちが5、6粒ずつ白に入れ、挽いていく。

「入れすぎると、うまくいかないからね」と声がとぶ。根気と手間のいる作業だ。

挽いた大豆は大きな釜に入れ煮たたせて、布袋で漉す。「ああ、これがオカラになる訳ね」と、参加者の女性同士が頷づき合っている。「見てごらん。こっちが豆乳だよ」と、子供たちに説明する父親。初めて見る豆腐づくりにどの顔も真剣そのものだ。

布袋で漉した豆乳に中沢さんと遠藤さんがニガリを打つ。豆腐づくりのハイライトとも言える瞬間だろう。ニガリを打った後は、桶に布を敷き、そこへ豆乳を流し込んで出来上がり。味見をさせてもらうと、大豆の香りが口の中いっぱいに広がった。ゆっくりとくずれてゆく歯応えも、なつかしい昔ながらのもの。こんな味はもう郷土食と呼ばれるものになってしまったんだなぁ、と淋しい気がしな

▲上／友だち二人で参加した斉藤、遠藤さん。竹の花器づくりに挑戦。下／子供だって、小刀の正しい使い方を覚えればこんなに上手。
▶自然の里の丸山優所長。「さまざまな交流の拠点にしたい」と語る。

青少年自然の里の庭で
竹細工をする子供たち。

いでもない。

食堂の一角ではそば打ちが始まっていた。講師はやはりここの集落の、巾野富久子さん(70)と深沢嘉枝子さん(69)。どちらも昔からこの集落でそばを栽培し、打っていたというベテランだ。

参加者たちは顔に汗を浮かばせながら、そば粉に水を打ち、こね上げていく。

「どうかね、こっちは」「どうれ、見せてごらん」と言いながら、巾野さんと深沢さんが参加者たちのテーブルを廻って歩く。指導の仕方も堂に入ったものだ。

参加者の中には来春ニューヨークで日本そば屋をオープンするという今村豊臣さん、恵美子さん夫妻や、甲府で和食の店を経営する広瀬美智子さんなど、プロの料理人もいて、食堂には熱のこもった雰囲気が漲っている。

外のテラスではそばつゆを作る人たち、そして天ぷらを揚げる人たちもいて、今日の講座で作ったものはすべて夕食のテーブルに並べようという段取りだ。子供たちも野菜を切ったり天ぷらを揚げたりと、どんどん手伝う。

打ち上がったそばは茹でられ、スタッフたちが作っておいた竹の器に美しく盛られた。同じ器の、筋で仕切られたもう一方のスペースには水を張り、先程作った花ローソクを浮かべた。テーブルには豆腐と天ぷらも並び、全員が着席して、ローソクに火が灯された。天井の明かりが落とされると、花ローソクの温かな光がいくつもゆらめいて、幻想的な空間が広がっていく。

光芸家藤本光三さんの演出によるこの夜の夕食は、何とも心温まる素晴らしいものだった。この日の料理に使われた素材は、ソバ粉を除いてすべてこの施設内か、集落の中で栽培されたものだという。

参加者たちはこの夜、ここ自然の里の宿泊棟に一泊し、翌日は近在でとれた竹を使って、花器や食器づくりを楽しんだ。

平均年齢72歳。人口36人というこの小さな山合いの集落に、たくさんの人たちが訪れ、暮らしの技や伝統食を学んでいく。集落に賑やかな声が響き渡り、老人たちは講師として駆り出される。活躍の場を与えられたお年寄りたちは、どの顔も凛として頼もしい。

自然の里の果たす役割は、青少年の研修施設という枠を超えて、大きな交流の輪を地域へ、町へと広げ始めたことである。

「なかとみ和紙の里」を文化芸術とふれあう場に

中富町（人口4900人）は、富士川沿いに広がる豊かな丘陵地で、戦国時代にはじまる西島和紙の産地。県内では数少なくなった手漉き和紙の技術を伝承し、和紙の魅力を普及していきたいと「なかとみ和紙の里」を開設した。西島和紙だけでなく、全国の和紙が2500種類も揃っていて展示販売されている他、紙漉きの体験教室もある。

隣接して「なかとみ現代工芸美術館」、食事処「味菜庵」があり、文化芸術とふれあう交流の拠点になっている。

一方、なかとみ青少年自然の里では今後も陶芸や藍染など、さまざまな講座を月一回以上企画、参加者を募っている。個人でも家族でも小学生以上なら誰でも参加できるが、小中学生に限っては保護者の同伴が必要だ。

日帰りコース、一泊二日コースと講座の内容によって変わるが、日帰りは昼食付きで3000円。一泊二日は夕・朝・昼食の3食付きで5000円。近在で穫れた新鮮で健康的な素材を使った食事は、格別の美味しさだ。

●山梨県立なかとみ青少年自然の里
☎0556(42)3181

●なかとみ和紙の里
☎0556(20)4556

文／金山淑子　写真／小林　恵

自然の里の頼もしい講師、深沢さん(右)と中沢さん(左)。「いろんな人たちと話をするのは楽しいね」

や自然を［デザイン］と地域の交流（京都府丹後町）

精華大建築学部の学生手作りの船型をした野天風呂（中浜海岸）

京都精華大学美術学部デザイン学科（京都市左京区）では、4年生の有志が丹後町の宇川流域の集落をオリエンテーションし、それを卒業制作の作品にまとめている。名もない野草を調べてスケッチし、インテリア用に図案化した作品、鞍内（くらうち）集落に足しげく通って人々の魅力や暮らしぶりを撮影、「やさしさの郷丹後町」としてイメージポスターにまとめた作品、古い生活用具や食物をヒントに新しいデザインを試みたニューグッズ等々。これらは京都市内で展示発表会を行ったあと、丹後町でも展示発表し、作品の一部は採用・活用されている。学生たちの来町、交流で、地域にも活気が出てきて、Uターンする若者も増えてきた。祭りの神輿かつぎ、伝統漁法の継承にも学生が助っ人として活躍している。

宇川流域集落の離村、廃校が契機に

丹後地方は古い伝統産業や生活文化、自然環境を残している地域。しかし過疎化が進み、丹後半島に突き出した経ケ岬の西側の海に注ぐ宇川の上流にあった集落は、4つのうち3集落が離村・廃村し、いまは鞍内集落だけになっている。鞍内地区も20戸、小学校の廃校問題をきっかけに大阪府摂津市との山村留学、民宿等を整備しての交流活動に取り組んできた。

一方、京都府が音頭をとり、10年ほど前から京都大、大阪外大、立命館大など約10校が丹後地方の各地に入って伝統文化や自然を研究調査してきたが、平成7年から京都市内の各大学と北部市町が協力して地域文化づくりに取り組む「丹後地域オープンカレッジ事業」がスタートした。精華大学は15年前から丹後町にセミナーハウスを設置していることから、美術学部丸谷彰教授のゼミが中心になって、宇川地区集落の調査研究、交流活動に積極的に取り組んでいくことになった。

実際にフィールドワークを授業に入れるのは大変。1～3年生は学科がぎっしりなのでムリ、比較的ゆとりが出てきた4年生が対象。4月に来町して、各人がテーマを決めて季節毎や、農作業や行事の節目毎に訪ねて、住民と交流を重ねながら、作品に反映していく。その他にも建築学部の学生たちによる廃校となった学校の改修活用への提案、伝統漁法「タコばかし」をアピールするためのイベント開催も行われ、9年1月のナホトカ号重油流失では大勢の学生が回収作業に参加するなど、精華大の学生と住民の交流は深まっている。

▲鞍内のお年寄りと語る橋本さん、竹本さん

▲丹後の民具等について長老から聞く丸谷先生（左）

▲教室で制作中の森さん、石谷さんと指導する丸谷先生。

◀2月末に丹後町で開催される精華大学生の作品展示発表会

住民との交流や自然観察は学生に大きな感動を与えた

京都精華大学は洛北の穏やかな自然環境の中にあり、地下鉄「国際会館前」下車、スクールバスで約10分。68年に「自由自治」を理念に2学部をもつ短大として設立されたが、79年に4年制大学に移行し、現在3000名が学び、人文、美術学部には大学院もある。美術学部では3年次に大学をはなれて西陣織、友禅染、竹工芸、京造園等の伝統工芸の工房で学ぶ学外実習に力を入れており、卒業後の進路にも生かされている。丹後町でのフィールドワークもその一環といえるだろう。

丸谷彰教授は京都生まれ。個人的にも古い文化や暮らし、用具等に関心があり、長年間京都や丹後地方の農村漁村に伝わる食物や用具の作り方、使い方、収納の知恵等をフィルムに収めてきた。これらの貴重な映像を現在編集作業中で、間もなく一般公開用映画として完成する。

丹後地域文化調査グループの調査報告書は毎年一冊にまとめられている。97、98年に宇川流域を訪ねて調査しそれをモチーフに制作

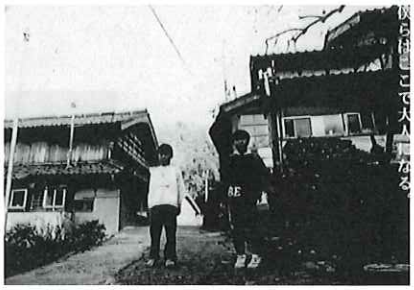
青少年が異文化交流②

農漁村の文化
京都精華大学生

したデザイン学科生徒の作品を一部紹介してみよう。

橋本佳奈さんは鞍内、上野地区の人々の誇りある生き方や飾らない姿、優しい素顔に感動して写真をとりつづけ、「皆にもぜひ来てほしい」とポスターにした。素直にただ撮ったというモノクロの写真と上手なコピーは町内でも評判となり、町の各所に今も張ってある。

▶松本さん。卒業後も制作を続けカーテン、マフラー、傘も自分の作品。



▲橋本佳奈さん「やさしさの郷丹後町」イメージポスター

卒業する前に京都の美味しいパンと写真を持って全戸を挨拶して回ったという。

竹本麻素美さんは同地区の伝統食品や用具に関心をもち「ヤタラ漬」を新しい意匠で土産品として売り出すことを提案、ほかに丹後ちりめんの残糸を和紙に織り込んだモダンな絹和紙の照明用品を制作した。

松本明美さんは宇川流域の植物を観察調査し、その感動と魅力を「宇川ブランドインテリアファブリック」に提案、京唐紙の技法を使って和紙のカーテン等も作っている。現在は神奈川県の自動車会社宣伝部に就職、滋賀県の実家に帰る時に丹後へ足を延ばしたいと思いつつ、大学で学んだ染色を続けている。

大部薗友絵さんは名もない植物の花や実の豊かさと農家暦を重ね合わせてシルクスクリーン、オフセット印刷で「宇川植物誌」を制作した。

▶大部薗友絵さんの「宇川植物生活誌」12種類の草花をシルクスクリーン印刷。
▲松本明美さん「宇川ブランド・インテリアファブリック」京唐紙技法の図案の他に、宇川の美しさを写真等でも紹介。

▲竹本麻素美さん「ヤタラ漬のためのパッケージ」提案

翌99年の報告書では、主として海辺地域を調査して写真やイラスト等で組合せたホームページによる情報通信が人目をひく。丹後の民話や観光スポット等も入り、住民にとっても役立つ作品になっている。

目下教室では発表会にむけて森咲江さん、石谷礼子さんが作業中で、石谷さんは虫食いの葉をリトグラフに、森さんは海岸の朽ちた木と木漏れ日をイメージした和菓子の提案。京都の老舗「末富」さんが試作してくれるそうで、丹後町の発表会には同町の職人さんに作ってもらい皆に配りたいと目を輝かす。

農山村に関心を持った学生だが、将来地方に住みたいとか、職人になりたいという意志はあるのだろうか。それについて丸谷先生は、「卒業後は企業に入るより、職人的な仕事や作品づくりを続けたいという学生が出てくるようになった。でもそういう就職口は少なく、地方の場合は殆どないのが現状です。田舎に住むことにも抵抗感はなく、そこで職人的な仕事が出来るなら喜んで行きますよ。そういう場が減っているのが残念です」と語る。

学生たちのこれらの調査研修、作品制作には、交通費や材料費等かなりの費用がかかるが、県や市町村の助成はない。もう少しバックアップしてくれたり、調査した地域以外の町民も関心を持ってくれると嬉しいのだがと先生は言っていた。

丹後町鞍内地区では、京都精華大学との交流を機に、Uターンする人が増え、子供の数も確実に増えてきた。海水浴場に船の形をした野天風呂を作る建築家学生提案の「タコばかしサミット」や伝統漁法タコばかしを交流事業として生かすことも検討され、町は総合的な定住対策に取り組み始めた。

文／浅井登美子
写真提供／京都精華大学丸谷研究室

ホーツク最北の村から
キー村との国際交流（北海道猿払（さるふつ）村）

半世紀前の惨事を交流の絆に

初冬のその日、オホーツクの海は荒れて、地平線は藍色の鉛を伸ばしたように空に溶け込んでいる。インディギルカ号慰霊碑は、海からの風で時々ひゅうひゅうと小さな金属音を発し、それは物悲しく過去の出来事を私たちに語りかけてくるように聞こえた。

昭和14年12月12日、猿払村南岸・浜鬼志別沖で旧ソ連船インディギルカ号が激しい吹雪の中で座礁。村民総出で救助に当たり、約400人を救出したものの720人の漁夫とその家族が命を失うという大惨事となった。

村では地元の人達が中心となって毎年犠牲者の供養を行ってきたが、昭和46年「このような海難事故を二度と起こさない」願いと、国境を越えて犠牲者の冥福を祈りたいとインディギルカ号遭難者慰霊碑を建立し、旧ソ連海運省から要人を招いて除幕式を行った。

以来、旧ソ連の政府、経済関係団体、文化交流団体との交流が始まり、猿払村はロシアの人々から最も信頼と親しみを持つ日本の村となってきた。しかし当時は日本とロシアの関係は険悪で、昭和63年にはサハリン州漁業消費協同組合から海産物の合弁会社設立の申し込みや、海産物共同探査・技術提携の依頼があったが実現しなかった。そのころオジョールスキー村から村の代表者を招待したいという話があり、道水産部職員極東地方派遣団を通じて熱心な姉妹提携を呼びかけてきた。

オジョールスキー村と友好姉妹村へ

平成2年6月、猿払村の村長、議員、漁業関係者代表14名がオジョールスキー村を訪問、村民あげての心温まる歓迎を受け、姉妹村へ向けての準備が始まった。猿払には同年10月に15名のオジョールスキー村民が来村、途中、終戦後肉親と離れ離れになった樺太にすむ母親と子供らが対面するシーンもあり、両村の交流は内外関係者の関心を呼んだ。

かくして、平成2年12月25日、オジョールスキー村村長、道関係者らを猿払村に迎えて友好姉妹村の正式調印が交わされ、村では3年より中学3年生全員をオジョールスキー村に派遣、同村からも同様に子供たちが来村する相互訪問交流が続けられている。5年には猿払村国際交流協会が結成され、大人たちの相互交流も始まっている。漁港にロシアの人の姿が見られることもあり、民間レベルの交流は深まりつつある。

「日本はなんて裕福で便利だろう」拓心中学生が国際交流で痛感したこと

両村の生徒間交流は毎年夏休みに実施される。99年には7月24日から28日までの5日間拓心中3年生43人に引率・随行者ら12人がオジョールスキー村（以下オ村）を訪問した。オ村からは8月19日から24日まで52人（子供35人、大人17人）が来村している。

稚内からコルサコフまで定期航路のフェリーで約5時間、そこからバスで1時間という近くて遠いサハリン。日本の子供たちはオ村の人々の暮らしや町並みをどう感じたのだろう。学校で生徒たちに会って話を聞いてみたくなった。

風が強く暗雲が激しく流れる海岸から内陸部へ入っていくに従い、薄日がさす穏やかな天気に変わった。北海道の最北部、宗谷管内のほぼ中央に位置する猿払村は総面積585・65㎞、北海道で最も広い面積を持つ村。稚貝をオホーツクの海で時間をかけて養殖するという漁業の取り組みで高級帆立貝日本一の品質と漁獲高を誇っている。内陸部は一大酪農地帯で、村営牧場を中心に7000頭をこえる牛が飼育されている。

広大な大地を西に向かって暫く走ると、カシミア色の煉瓦にグリーンの屋根が映えるモダンな役場庁舎と美しい町並みが見えてきた。役場に寄り、昨年交流事業に同行した振興課

放課後集ってくれた中3の生徒たち。廊下にはオ村の物産、土産品、写真等が展示してある。

青少年が異文化交流③

日ロの友好の絆をオ
サハリン州オジョールス

オホーツク海を望む地域は猿払の新しい観光のメッカで、ホテル、道の駅、村営牧場と農業資料館「風雲の塔」等がある。

中山誠さんに話を聞いた。

「冬に打合せをして、日程・予算を決めます。随行を含めて55名、役場からは交代で2～3名が参加します。費用は村が国際交流費として船賃5万5000円とパスポート代を助成、滞在の諸費用はオ村、オ村から来村したときは猿払村が負担しています」

漁獲高年間60億円という猿払村は財政的にも豊かで、未来を担っていく青少年に国際感覚と地域への誇りを持てる子供たちに育てたいという願いもあるのだろう。「オ村への旅費などは、フェリー代が高いことを除いては、それほどかかっていないんです」と中山さん。オ村の生徒たちは中学校の向いに立つ農村改善センターで宿泊、村内外施設を見学したり、学校を中心に各種交流会を開催、地域へ出て家庭でのホームビジットするなど、交流をメインにした無理のない日程になっている。

拓心中学校は、放課後を迎えて生徒たちで大賑わい。職員室も生徒であふれ、先生と友達のように語る姿が印象的だ。3年生は補習授業を行っていたが、何人かの生徒が集まってくれた。

「オ村へ行く前は食事やトイレのことが心配で、余り気乗りしなかったけれど、ホームビジットの家の人達がとても親切で食事も大変美味しかった。子供たちは外で積極的に遊んでおり、スポーツを通して交流したり、本を使って会話するなど、沢山の良い思い出が出来ました」と笠井裕輪君。

「家の中はきれいで、食事に御飯も出してくれて感激した。みんな親切で積極的に話しかけてくれるのだけれど、ロシア語を話せる人は少ないうえに英語もあまり通じないので、会話には苦労しました」と足立恵美依さん。「想像していた以上に都会で驚きました」(岡本三葵さん)、「オ村の生徒は同じ中3でもおとなっぽく皆踊りが好きで上手。いい友達もできたので、交流していきたいと思います」(工藤聖希さん)

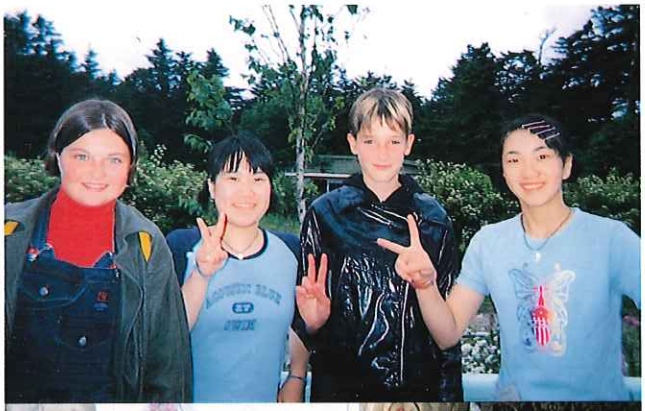
「ユジノサハリンスクのデパートには変わったものがいっぱいあった。そうは体験できないことなので行ってよかった」(小俣弦也君)

学校がまとめた〔国際交流99年度版〕の報告書を読むと、生徒の大半が、最初はオ村の訪問には乗り気ではない。サハリンを含めて街や建物の古さ、トイレの問題、道路の舗装率の低さ等、生活環境の違いを日本と比較して遅れていると感じる一方、村民のおおらかさ、温かい歓迎ぶりに感動している。そして「日本はなんて裕福で便利な国だろう」と改めて見直す機会となったようだ。

事前に稚内市からロシア語の先生を招いて語学を学んだり、授業でも多少は学んでいるのだが、積極的に異文化にふれよう、今後も交流を続けていこうという意識は希薄そう。これは猿払の子供たちに限らず、日本の現代っ子達共通の〈白け〉〈冷やかさ〉でもあるらしく、そのことは父母や先生も指摘している。中3は高校進学を控えて忙しい上に、ロシア語は難しい。そのため、手紙等をやりとりしている生徒はほとんどいないようだった。中1か2年生の方がいいのではという声もある。

今年10年を迎えるオ村との交流事業。10年を節目に、村民、学校、生徒皆で今後の国際交流のありかたを考え、試行錯誤しながらも息長く続けていってほしい。

文／浅井登美子
写真／小林　恵



▶オジョールスキー村にて。中学生たちと。

▶家庭ではおいしい手料理でもおもてなし。

▶オ村の生徒によるロシア民謡。
▼夜ははっぴを着て民謡を楽しむ(共に猿払村にて)。

猿払村役場振興課 ☎01635(2)3131

かやぶきの里

住民と行政の協働による「じょんのび村」づくり

連合東京との「雪掘ボランティア」も定着

（新潟県高柳町）

高柳町は、昭和30年の町制施行時には人口1万700人であったが、現在では2800人となり、人口減少率、県ワースト1となってしまった。地域の活気は著しく停滞し「お金を貯めて早くいいところに転出したい」、そんな雰囲気が町を支配していた。

そんな中、町内の若手が「このままでは町が無くなってしまう！」と危機感を肌で感じ、「高柳の生き筋は交流だ」の想いから、ゲリラ的交流活動を無我夢中で始め、積極的な外へのアピールと共に、町民エネルギーを呼び起こし、ビジョンづくりの母体となる「ふるさと開発協議会」の発足へとつながった。

ふるさと開発協議会は約50名の町民からなる委員と数名の助言者（専門家）から構成され、町を見つめ直すことから始めた。委員が主体的に検討会・住民懇親会・先進地視察研修・町民集会等を行い、「住んでよし、訪れてよしの高柳ビジョン」（交流・観光構想）をまとめた。

「交流・観光」の展開を着実に推進するため①～③の課題を「縄をなうように一体的に取り組んだ」という。

「じょんのび村」の整備

①コア施設「じょんのび村」・「県立こども自然王国」の整備

「じょんのび」とは、ゆったりのんびりした、真から気持ちいいのニュアンスを持つこの地方の言葉。じょんのび村には宿泊施設「萬歳楽」、交流・体験の家「銀兵衛」、手づくり工房「百菜館」、ヒノキ&露天風呂「楽寿の湯」、貸別荘「ファームハウス」等があり、隣接して県立こども自然王国がある。

②サテライト施設「かやぶきの里」

都市の人が集落の中に入って、村人の生活リズムで「暮らし」を体験し、交流を深めながら地域の活性化を進めるため、荻ノ島、門出の二ヵ所に「公設民営」のかやぶきの里を整備した。荻ノ島かやぶきの里は全国的にも貴重な環状茅葺集落で、集落の人たちが出資をして運営組織を作り、地元の素材を使ったお母さんの手づくり料理、各種ふるさと体験など、村の人と地域の魅力を大いに活かして活動をしている。

③農山村としての魅力づくり

高柳町が持っている自然環境、土地柄のよさを、交流・観光という仕組みによって「掘り起こしたり」「磨いたり」「新たに付け足したり」することを地域活動として、継続的に取り組んでいる。

「雪」を楽しむ――交流行事

地域住民を主体に、自らが楽しむとともに町外からも大勢が参加して行っている行事は主として次のものがある。

○産業文化まつり

11月3日の文化の日に実施。学校施設をメインに、農産物、食品、民芸品、日用品等、住民手づくりの「作品」が埋めつくす。かかし展や農産物の品評会、即売会、菊花展等も行われ、約3000人が来町する。

○狐の夜まつり

「藤五郎狐」の昔話をもとに、10年ほど前から実施している。栃ヶ原、漆島地区、「ゆめおいびと」グループが協力して開催し、約400人が参加。上の栃ヶ原地区の神社を出発、白衣をまとった提灯行列は約2㎞の道を歩いて下の漆島地区へ到達する。「自然」と「ひと」とのかかわりを感じることのできる素朴なお祭りで、10月の体育の日午後から実施。

○「YOU・悠・遊」

雪を逆手にとって大いに楽しもうと2月最

上／「YOU・悠・遊」のイベント
下／狐の夜まつり

終の土、日曜日に実施される。雪で作った巨大迷路をはじめステージショウ等のイベントが盛り沢山。「じょんのびのれん街」のふるさとの味が評判。約5000人が参加。

平成3年のコア施設の建設と交流事業等により、これまでほとんどなかった観光客が現在では25万人までに増加している。関連施設全体の売上げは約6億円、町への経済波及効果は9億円とも算定されている。

「じょんのび」の語源は「寿命延び」ともいわれているが、時代と共にそのイメージも広がり、「快適」や「自由」等では表現しきれない心身の「心地よい」雰囲気が求められるようになった。そのため町では、人と自然、人と人を結びつける「じょんのびの雰囲気」を暮らし方や生き方に反映、観光の魅力として活かしていきたいという。

お米づくりから雪掘まで 連合東京とのふれあい交流

「連合東京」は労働組合組織で、阪神・淡路大震災を契機に「市民・連合ボランティアネットワーク」を発足、自然災害等のボランティアを行うため「サポート隊」を結成した。結成5周年に、青年委員会メンバーより、社会貢献活動をしたいという要望があり、連合新潟を通じて高柳町で「雪掘ボランティア」が実施されることになった。

平成7年2月、32名の若者が参加してスタートした「雪掘ボランティア」は、年々参加者の数が増え、門出、荻ノ島地区の他に田代、山中、塩沢地区でも実施されている。

雪掘ボランティアは、初日は地域の人々の指導で雪掘に使う「かんじき」づくりをしながら交流、翌日は雪掘作業等と夜は交流会、3日目は感想等を発表しあって総括という2泊3日のコース。

平成9年5月には都会とふるさとが心豊かに共存する〝協働と互恵精神〟に基づき町と連合が「ふれあい交流協定」を締結。以来、交流水田を設けて田植え、除草、稲刈り、新米の配布、茅葺屋根修理等への参加も行われるようになった。

この「ふれあい交流協定」を発展させるため「連合東京じょんのび会」が出来、有志や賛助会会員約50名がさまざまなかたちで高柳町と交流を続けている。

連合東京にとって高柳町との交流は、地域社会での人と人との繋がりや助け合いの大切さ、自然環境の大切さ、高齢化等を改めて知る機会となった。住民にとっても若者との対話は精神的支援にもなり、毎年楽しみにしている。

今後はさらに交流と理解を深めながら、高齢社会、少子化時代に対応して、高齢者介護や過疎地域の課題等にも共に取り組んでいく予定である。

（資料・写真提供／高柳町地域振興課）
☎0257(41)2233

▲田植、稲刈りをする連合東京のじょんのび会。
▶「雪掘ボランティア」の初日は地域の人の指導でかんじきづくり。翌日は雪掘作業。雪おろしのあとは雪遊びに興じる。

お出かけください！ 我がまちの交流事業

ダイバーも参加して海中クリーン作戦

静岡県南伊豆町

伊豆半島最南端の南伊豆町は、長い海岸線を持ち、観光、漁業で海の恵みを受けているが、海洋レジャーを求める若者と漁業者の間でトラブルが発生したり、釣り人口の増加等で海を取りまく環境の悪化が問題になってきた。町では平成5年に漁業関係者とマリンスポーツ愛好家で「南伊豆町マリンスポーツ振興会」を結成、平成6年より美しい海を皆で守りながら交流を深めようと、全国に先駆けて県内外のスキューバダイビング愛好者の協力により「海中クリーン作戦」を実施している。

「青く豊かな海、美しい浜辺、それは人類共通の貴い財産であり、この大切な海を慈しみ守り、後世に伝えることは、今に生きる私たちの使命である」をスローガンに、町、漁業組合、マリンスポーツ振興会、地元住民、関東・東海のダイバーなど200人から300人が参加して、毎年5～6月に海のクリーン作戦を行う。

事前調査でごみが多かった清掃ポイントへ向かい、目的地に到着すると5～6人に分かれて潜水し、約40分間にわたって海底に散乱している釣り糸や網、空き缶などを回収する。平成6年は786kg、翌年は635kg、10年には446kgを回収した。

参加するダイバーは交通費、宿泊費も自己負担のボランティアだが、夜は労をねぎらって地区集会所で漁村の人達との交流会を開く。翌朝も住民も総出で参加して海岸付近のごみ収集を行い、終了後は参加者全員で昼食の海賊バーベキューに舌鼓を打つ。

今後は海に通じる川や山林等の清掃も実施していきたいと検討している。

念願のGTを再開。サーキット場に爆音を

大分県上津江村

「家一棟分ふるさとの森づくり」事業等ユニークな村おこし（本誌16頁）で注目される上津江村だが、平成2年に巨額を投じて建設したF1用の本格的サーキット場は、数回レースを開催しただけで、バブルの影響を受けて休場に追い込まれていた。村では第三セクターに委託、12名の社員がレース開催へ向けて営業活動や建物の保守点検を続けてきた。特にーターンした古田正人さんは「このままだとせっかくの優れた施設も忘れられてしまう。大きなレースを誘致したい」と開催へ向けての努力を続けた。その結果、昨年11月28、29日にGTオールスター戦を開催することが出来、村には5年ぶりに延べ5万人の観客がやってきた。

レース再開へ向けて、村民約80人がボランティアで草刈りや道路の清掃をし、役場職員を始め村の建設業の人達が、機械や建物のメンテナンスを手伝った。

当日は雪が降るなどのアクシデントがあったが、参加したレーサーも観客も満足し、成功を収めた。古田さんは「あの爆音が村に活気を取り戻してくれた。

◀レースを再会したサーキット場

「交流事業のあり方に関する調査研究」で扱った交流事例

（本誌で取り扱った町村は除く）　　財過疎地域問題調査会（平成10年度調）

北海道	黒松内町	ブナを生かしたまちづくりへの提言・参画
	沼田町	全国明るい雪自治体会議
	中富良野町	フラワー都市交流
	下川町	万里の長城築城事業
	女満別町	オホーツク音楽セミナー
	忠類町	ちゅうるいまるごと体験交流
青森県	深浦町	滞在型交流施設WeSPa椿山
	南郷村	ジャズフェスティバルによる都市住民との交流事業
岩手県	花泉町	金沢小学校・市谷小学校ふるさと交流推進事業
秋田県	八森町	四季の自然と生活風土を体験
	大森町	大森町における高齢者の交流
山形県	大江町	七軒地区山里留学
福島県	飯舘村	いいたて農の大地に生きる会
長野県	八坂村	育てる会・八坂学園
茨城県	美和村	全国美しい村友好姉妹村提携
群馬県	中里村	恐竜化石を始めとする国際文化交流
新潟県	真野町	姉妹都市交流事業
石川県	能都町	まほろば成人式
山梨県	早川町	日本上流文化圏研究所
岐阜県	久瀬村	都市交流事業・交流施設整備
	清見村	ひだ清見ふるさとプラザ
愛知県	足助町	足助町福祉センター「百年草」小さな足助の試み
三重県ふるさと振興協議会		過疎地域まちおこし交流会
兵庫県	美方町	交流とともに生きるまちづくり
奈良県	下北山村	山びこ留学制度
中国山地県境市町村連絡協議会		県境サミット、エメラルド・プロジェクト
島根県	横田町	そろばんによる国際交流
	石見町	ゆとり体感inアロマティック石見
島根県邑智郡町村総合事務組合		悠邑ふるさと構想
岡山県	新見市	そばの里づくり
	有漢町	風を集め、風をおこすまちづくり
広島県	吉和村	魅惑の里　農林業体験交流
	大和町	まほろば連邦の建国、まほろばサミットの開催
	豊松村	アンテナショップとよまつむら
	高野町	タカノの町の交流会
山口県	秋芳町	国内外芸術家招待事業「交流の館」
徳島県	井川町	自然と人との共生を目指す「大学の森」
愛媛県	広田村	広田村山村留学
	瀬戸町	イベント交流からのまちおこし
高知県	大川村	白滝の里、山村留学制度
	吾北村	ほのぼの王国もみじまつり
福岡県	矢部村	杣の里交流事業
佐賀県	富士町	古湯映画祭、ファーブルの森づくり
	三瀬村	田舎と都市のふれあい祭り
長崎県	大島町	勇気そして感動をありがとう長崎大島トライアスロン大会
	福島町	三福島町交流事業
熊本県	矢部町	迫田オーナー制度
	清和村	緑川生涯学習館宿泊施設「清流館」整備事業
	五和村	イルカウォッチングでつくる交流のまちづくり
大分県	庄内町	神楽の交流、ミステリアスライブ・イン庄内
宮崎県	東郷町	牧水のふるさとづくり、農業体験の旅
	南郷村	「百済の里」と青少年日韓親善交流事業
鹿児島県	頴娃町	ふるさと「えい」交流会・ふるさと便
	宮之城町	スポーツ合宿
	下甑村	こしきKOIKOI物語
	霧島町	永水小学校山村留学の取り組み
	根占町	ねじめドラゴンボートフェスティバル
沖縄県	本部町	冬の北海道（南富良野）体験の翼

鹿児島市から休暇をとって柚子加工場で2日間働いた男性。地元のお母さん達と。

これからも年1、2回は開催して本格的なレーシングコースとして位置づけていきたい」と語り、次の開催へ向けて活動を続けている。

カリコボーズのワーキングホリデー

宮崎県西米良村

西米良村は椎葉村に隣接する秘境の村で、96%が山林。かつては国内の木炭の一大生産地だったが、林業の低迷で若者は中学を卒業すると高校へいくため出ていったまま帰らず、人口は1614人と昭和35年頃の3分の1になっている。そんな村を元気にし、都市の人達も訪れて交流できるふるさとをつくりたいと創設されたのがカリコボーズの休暇村「米良の庄」ワーキングホリデーだった。

これは、来村した人が柚子や花卉栽培等の仕事を手伝って何らかの報酬を得るとともに、村の人と交流を深め、ゆっくり滞在してもらおうというもの。宿泊にはキャンプ村のコテージや「民話の里」が利用できる。

平成9年に試験的に行ったところ、マスコミに取り上げられたこともあって全国から約300件の問い合わせがあり、9～12月までに計29人、延べ滞在137人が来村した。そのため10年から本格的に開催、受入れ先農家は9戸となり、5～12月までに39人が訪れた。北海道、東京からの女性グループもいる。県内から花卉栽培の仕事を手伝いにきた女子高校生はその後も時々やって来る。

時給は600円で、一日実労7時間。2、3日働いてあと数日間観光や山歩きして帰っていく人が多い。雇う側は「やっと仕事が慣れた頃帰られるので、労働力としては期待できないが、村人の励みになるので、どんどん来てほしい」と言う。人数的にはまだ多くないが、都市などから人が来て交流することで、住民にやる気が出てきた。同村の柚子、花卉は高品質な高原産として人気があり、村の特産品として売上を伸ばしている。昨年4月には天然温泉の「カリコボーズの湯」も開設、5人の若者がUターンした。

なおカリコボーズとは、この地方に伝わる河童の一種で、山の神、水の神として大切にしてきた。素朴で神秘的な山里のイメージとしてキャラクターに採用、ひと味違った休養村づくりをめざしている。

おいでよ、山の学校へ 山村留学生募集

和歌山県清水町立楠本小学校

清水町は和歌山県有田郡の東端に位置し、高野山を源とする有田川及びそれに注ぐ支流が幾つもの川筋をつくり、川筋ごとに26の集落が点在する。町の面積は196㎢とかなり広く、山林が90%を占めるという自然郷。

町には県立有田中央高校清水分校があるほか、小学校は本校7校、分校2校、中学校3校があるが、児童・生徒数の減少で、小学校は1校をのぞいて複式学級になっている。先生一人に児童5・2人と手厚い教育がなされているが、超小規模は好ましくなく、山村留学生の受入れが一部の地域で実施されている。里親、親子留学などが行われ、変化に富んだ自然と集落の人々の温かく熱心な対応で、留学生には好評だが、里親の高齢化で受入れを止めてしまった地区も。

楠本小学校(校長・栗山昭美)もそんな一校。現在1年生がいなくなり、全校で11名となってしまった。そのため地域の人たちの強い要望で、以前受け入れていた山村留学生を再募集することになった。

楠本小学校は、有田川の上流の二川ダムの北側、長峰山脈の中腹に位置している。緑の山と段々畑に囲まれ、ダムを見下ろす景色は絶景で、訪れる人々を驚嘆させる。子供たちは、豊かな自然と素朴な人情のなかで、のびやかに個性豊かに育ち、行き届いた教育と都市では味わえない体験学習を楽しんでいる。

道路も整備され、和歌山市や海南市への交通も便利になってきている。また同町には、高野龍神国定公園、生石高原県立公園や、御田の舞、歌舞伎芝居等の貴重な民俗芸能があるほか、天然の良質な温泉地としても人気のある町。しみず温泉健康館、体験実習館「しみず温泉あさぎり」には年間50万人が訪れている。

●山村留学の清水町楠木小学校
☎0737(23)0343へ

キャンプで作ったカレー、最高においしかったよ。

ビデオ完成間近！

「ふるさとを生かす ふるさとに生きる」(仮題)

VHSカラー60分

平成5年度から制作した全6作品を総集編としてまとめ、過疎地域各地の地域活性化につながる試みを紹介します。引き続き、全国のCATV局での放映を予定していますので、どうぞご覧ください。

編集後記

▼今回は農山村と都市との交流事業を取り上げたが地域住民の交流に力を入れて元気を取り戻したムラにも注目したい。福島県北塩原村桧原地区は3年前に畑に温泉が湧いたのを機に、住民が無料で入浴できるビニールハウスの温泉と隣りに「桧原塾」という休憩場を作った。雪の日も皆が欠かさず入浴に来て、持ち寄った食物を広げて会話がはずむ。村おこしのアイデアも次々と生まれているようだ。

▼10年来毎年訪ねている南信州「下栗の里」(上村)には、孫達は必ず帰ってくる、それまでは我々がムラを守るという元気な老人達がいる。大きな風車を立て、「この音聞こえるか」と都会の子に呼びかける。廃校の小学校に村営のペンションが出来、Uターンも少しずつ増えて子供の声も聞えるようになった。交流事業として特別なことはしていないが、お年寄りの作る美味しい高原野菜と「元気」をもらいに、私達は今年もまた出かけていく。(A)

De POLA NO.18

[でぽら] 2000年 春夏号

発行日／平成12年3月15日
発行所／全国過疎地域活性化連盟
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル8階
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

編集協力・印刷／株式会社 ぎょうせい
協力／編集工房アド・エー／地域活性化センター

DePOLA［でぽら］NO.18
平成12年3月15日発行
発行／全国過疎地域活性化連盟 〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24 オカモトヤビル8階 ☎03(3580)3070代

財団法人 日本宝くじ協会
宝くじのホームページ
http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp

いい夢、咲かそ。

●本誌は財団法人日本宝くじ協会の
助成を受けて作成されたものです。

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、
公共事業に役立っています。
宝くじ